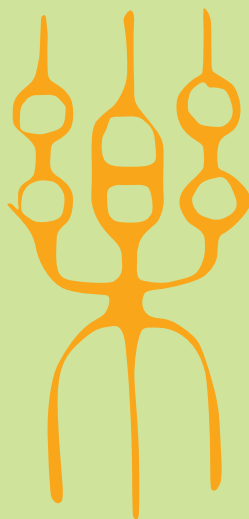


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター
所報

第9号 2008年3月



Newsletter
of the
Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

No.9 March 2008

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報

第9号 2008年3月

ISSN 1346-4590

目 次

所長対談 山路興造先生にきく ー日本伝統音楽と民俗芸能ー	3
エッセイ 定年に思う	久保田敏子 26
センターニュース	27
プロジェクト研究・共同研究の報告	34
非常勤講師の研究報告	40
専任教員の活動報告	45
日本伝統音楽研究センター 概要	57
編集後記	59

Newsletter

of the

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts

No.9 March 2008 ISSN 1346-45

所長対談

山路興造先生にきく
—日本伝統音楽と民俗芸能—

日時：2007年12月5日（水曜日）
場所：京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター所長室

聞き手：吉川 周平
（日本伝統音楽研究センター所長）

吉川 今日はお忙しい中、おいでいただきましてありがとうございます。今日の主なテーマは、「日本伝統音楽と民俗芸能」ということで、いろいろお伺いしたいと思います。

山路興造先生は有名な方だからご紹介するまでもないのですが、藝能史研究会の代表委員で、民俗芸能学会の代表理事もなさっておられます。これは文献と民俗芸能という資料の異なる二つの学会の会長を、それこそずっとやっておられるわけで、大変なことだろうと思います。

何故そんなことを申すかといいますと、東洋音楽学会とかいろんな学会がありますがお忙しいせいもあるんでしょうけど、代表の人がどんどん代わっていくなかで、私は非常に評価されるべきことではないかと思います。というのは、学会はある程度の高い目標があって、それに向かって邁進して行かなければなりませんから、度々指導者が代わるということは、どうでしょうか。そういうものを持たないところな

らいいと思うんですけれどね。それが山路さんはずっとやっておられて、非常にいろんなことに、特に後進の育成とかの事につきまして貢献されているのではないかと思います。それから山路先生はこの大学でも教鞭をとられたことがあると伺いましたが、京都市の歴史資料館の館長を長くなさって、そこでも京都市のために貢献されていると思うんですが。

この日本伝統音楽研究センターが設立されて今年で8年目ですが、他の機関との交流とかが、個人や共同研究会で行われているものを除くと、あまりありません。それで今日は京都市が求めている研究機関のあり方みたいな事についても、お伺いしたいと思います。

山路 確かに私はずうずうしく民俗芸能学会と藝能史研究会の代表を、もう10年ぐらいやっていますが、吉川さんのおっしゃるとおり、学会の代表というのは印鑑を押すだけではなくて、やはりその学会の学問をどういう方向に導いてゆくかという事のリーダーでなく

てはいけないと思っています。それから一番重要なのは、伝統音楽もそうですが、古いものを研究する若手がいなくなってきましたから、民俗芸能学会では本田安次賞という賞を作ったり、藝能史研究会のほうでは林屋辰三郎賞という、基本的には奨励賞を創設させた。若い人たちに賞を出してその気にさせる。これは両方ともとりあえずは出来あがりました。まあそういう意味では少しは学会に貢献した。それからもう一つ、私が長くやっている原因は、すぐ下に若手がいなくて事なのです。代わってもらえる人がいない事で。次の次の世代ぐらいただいぶ育っているのですが、私よりすぐ次の世代の若手がいなものだから、代表もなかなか代わるわけに（笑）。代わる人がいないというのがまあ現状なのかなという気がしますね。

◆京都市での仕事

山路 私は確かに京都市に大変深い関係がありまして、京都に来てもう30年くらい経つのですが。来てしばらく経ったときに、この京都市立芸大の非常勤講師を、美術学部の方でやらせていただいた。これは梅原猛先生が学長であった頃に、美術の学生も考古学とか民俗学を、ある程度学んでおかななくてはいけないという方針を出されて、それで民俗学と考古学の授業が非常勤で隔年にあったという時代が長く続きました。その民俗の方を担当していました。

10年くらいだったと思いますが、隔年ですから実質は5年でしょうか。そういうことでこの学校は非常に懐かしい。

それからもうひとつ、これからお話が出てくると思いますが、私は京都市立の歴史資料館の館長をやっていたのです。ただこの場合は、目的がはっきりしていたんですね。「平安建都千二百年」という事業にあわせて『京都市史』全26巻を完結せよ、というのが至上命令で、それで何年間か一生懸命に仕事をした。京都市が、お金は厭わないから建都千二百年の年には全巻完結しろってことで。そういう目的があったものですから若い連中を叱咤激励しながら、それを完成したのです。私なんかの場合だと正規の職員にならなくてもいいんじゃないかと思ったのですが、京都市としては、職員としてちゃんとやってくれないと若い連中がなかなか動いてくれないから職員になれ、とい



うことで。結局、市の職員でいたのが7年間だと思います。

やっと一段落して完結した後も、市の人からそのまま館長職でいることを勧められたのですが、初めから正規の職員にならなくてもいいのじゃないかと思っていたので、私はこれにはまったく賛成できませんでした。そういうことは絶対にできない質なんです。市の職員ということは、市民の税金を使っているわけですから、やはり京都市民に対して仕事をして、いかに還元するか。その仕事がない以上は職員でいるべきじゃない、というのが私の基本的な考え方でした。だから終わって次の1年は館長をしていましたけど、それから後は囑託館長になったというような経緯があります。

やはり何というんですか、公務員は税金で給料をもらってるっていう自覚がないといけないと思います。その給料に見合った、市民に還元していける仕事をやる、ということですね。私流のそのような考え方からすると、このセンターなどにも若干の疑問や意見があったりするわけなのですが。

吉川 まあ、それについては後でお聞かせ下さい。

山路 はい。

吉川 山路さんは京都市の、そうした事に参画してただけだから。こちらの方は、初代所長の廣瀬量平先生が研究のことを非常に大切に思われていらしたので、その所ばかりが強調されて受け止められているかたちがあるんじゃないか



山路 興造 (やまじ・こうぞう)

日本、特に京都の歴史や芸能史などの研究者として幅広く活躍。講演や学会での齒に衣着せぬ熱い発言でも知られ、後進の研究者を多数育ててきた。芸能史研究会代表委員、民俗芸能学会代表理事。

1939年生まれ。幼少より歌舞伎に親しむ。1959年早稲田大学入学後、学内の新劇のサークルにも参加したが、民俗芸能研究の本田安次、歌舞伎研究の郡司正勝の薫陶を受ける。京都で林屋辰三郎に出会うことにより文献資料を博搜した芸能研究を進める。「遠州西浦の田楽」(1964)、『翁の座 芸能民たちの中世』(1990、平凡社)ほか、全国各地の行政の委嘱による民俗芸能調査の報告書など、著作多数。

東京国立文化財研究所芸能部囑託、京都市歴史資料館館長をはじめ、かずかずの要職を歴任し、紫式部市民文化賞の選考委員もつとめる。

って、私は2代目なもんですから感じるところがあります。そのような事はあとでまた伺うことにしたいと思います。

◆早稲田大学での思い出

吉川 ところで、私と山路先生は、昭和34年に早稲田大学に入学したんだと思います。

山路 そうですかね。

吉川 それで同期なんですけど、まあ私は指導教授の郡司正勝先生（1913-98）に、学部時代ですけれども、「山路君で知ってる？」ってよく聞かれたんですよ。それは何故かっていうと、郡司先生がやっておられた折口信夫の『日本芸能史ノート』を読む読書会が放課後あって、それに私も最初は出たのですが、「幸若舞の特質と諸流」の笠屋三勝のあたりでお話を聞いていて、私はとても折口先生にはついていけないと思って、さっさと辞めてしまったんですけど、そのあと山路さんはずっとそこも主宰する。まあ何というんですか、塾頭みたいなことをなさっていたと思うんですね。だから先生は、私が何しろのろいもんですから、山路さんの刺激を受けさせなければと思って、「知ってる？知ってる？」と、まあ「近づきなさい」という事だったと思うんですけど。そのときは近づかなかったんですけど、学部を卒業した時に本田安次先生がやっておられた芸能史懇話会で山路先生と一緒にあって。私が演劇博物館（通

称 演博）のアルバイトをしている時間で、その芸能史懇話会は演劇博物館で行っていたものですから、演博によく山路先生が来られて。で、いろんな話を、ちょうど東京の神宮外苑を挟んで山路先生と私が東と西みたいな所に住んでたんで（笑）

山路 そうですね。

吉川 よく、帰りが一緒になったりすると神宮外苑を歩きながらいろいろな話をした事があったと思うんです。さて、これからは、山路先生が恩師の先生方と、まあ思い出とか、あるいは学問的なことで影響を受けられたような事について、お伺いしたいと思います。

山路 私は、8歳位から歌舞伎はよく見ていたのです。家の商売の関係で、明治座などに親父が寿司屋を出してたものですから。そういう劇場にフリーで入れたものですから、結構小さいときから古典的な劇には親しんでいた。で、高校くらいになりますと歌舞伎が非常に好きだったのです。ただ歌舞伎は好きなもんですから学問にしようとは思わなかった。そこで高校時代は新劇に夢中になっていたんですね、それで高校の演劇部などで演出をやるというのが私の楽しみだったのですが、大学に入って1年間だけは、早稲田大学の「劇団こだま」という学生劇団がありまして、そこで学生演劇をやっていたんです。

しかし2年目になりますともっと古いこと、それも民俗的なことに非常に興味を持ちました。そしたらちょうど、

私、吉川先生と違いまして教育学部出身なものですから、教育学部の先生に本田安次先生がおられて。本田先生の「芸能研究」っていう講座を聞いて。それで「ああ、民俗芸能っていうのは面白いものだったんだな」ということで、2年目からは、本田先生にくっついて結構あちこちの民俗芸能を見て歩く。その時に本田先生だけでなく、郡司正勝先生もいましたし、当時は宮尾しげを先生もいた。そういう先生方の後ろにくっついてあちこち行っていたというのが、民俗芸能に目覚めたきっかけというのですかね。ですからもともとはやはり新劇だとか歌舞伎だとか、そういう演劇の興味が常にあったんですが、それを学問にしようとは思わなかった。それで本田先生に従って民俗芸能というのを勉強し始めたのです。

◆民俗芸能研究との出会い

山路 ただ、民俗芸能研究は、本田先生が調査を戦前から精力的にやっておられた。民俗学というのは基本的には調査が中心なんですね。その調査を元にして、今度は論にしようと思うと、本田先生も含めて非常に難しいという所があった。まあ演劇にしても伝統音楽にしても、そうなのですが、そういうナマな、現在に生きているものの研究は、美学的に論ずることができたとし、今度は論文化しようとする、難しい面があるんですね。

そういうことで私が苦しんでいると

きに出会った論文があったんです。その論文は平山敏治郎という関西在住の、大阪市立博物館に勤めていた先生ですが、この先生がお書きになった、京都の閻魔堂狂言に関する報告があったんですね（京都市役所刊『京都郷土芸能誌』所収「千本閻魔堂大念仏狂言」）。その報告は基本的には調査報告なのですが、その半分は、その閻魔堂狂言の歴史について文献を使ってきちっと書いてあったんです。こういう形で芸能史的に民俗芸能を使っていけば、私でも論文が書けるかな、とそういう思いをいたしました。さらに、私が学生時代に、京都では林屋辰三郎先生（1916-98）を中心に藝能史研究会が起ちあがっており、私も2回目か3回目からは参加したという経緯がありました。

民俗芸能というのは、民俗芸能だけで学問にしてゆくのは非常に難しいが、歴史とかそういうもの、広い意味での文化史のなかでうまく使っていけば、ひょっとして学問になるのじゃないかなと。そういう思いを非常に強く持ったのです。もちろん民俗芸能の調査が基本ですから、ずっとそれはやってきました。論述する時に、そういう歴史的資料を同時に調べる。歴史資料と現在まで残された民俗芸能とをうまく組み合わせながら論を書いていけば、まあ論文らしいのが書けたんですね。ということで私の民俗芸能研究の方向性が何となく見えてきて今日に至っているわけです。

それはそうと、民俗芸能の調査とい

うのは、一度きちっと行っておかないと、他の人がやった調査報告書が読めないですね。自分が調査していれば、他の人の調査報告が読める、つまり理解できるんです。私は24、5歳の頃に静岡県の水窪町の西浦田楽の調査報告をまず書いたんです。ちょうど私の世代は金をもらって調査ができる世代でもあったんで、結構いろいろな機関からの依頼を受けての調査ができた。そういう形でいくつかの報告書も刊行された。調査だけは以後もずっとやっております。こういう調査はあくまでも報告に過ぎないのですが、同時に文献史料というものも調査しながら、芸能史的な面と民俗的な面と両方をやってきたわけです。その結果、藝能史研究会の代表と民俗芸能学会の代表をつとめるということに繋がってゆくんじゃないかなと思うんですね。そういう点で、東京から京都に遷り住んでから、多くの勉強が出来たと思っています。京都に来たきっかけは何かと問われると、私は五来重先生（1908-93）がいらっしやっただからと答えています。実は五来先生からは直接教えを受けたことはないのですが、そういう五来先生がいる、平山先生がいるというような環境。林屋辰三郎先生がおられて、上田正昭先生や植木行宣さんがおられる。歴史の文献を扱いながら民俗芸能の研究をやる先生が、関西に多かったんです。それからまた土壌としても関東の土壌よりも関西の土壌の方がはるかに私の研究には向いていた。それで

職がうまくあったものですから、東京から京都に遷り住んで、以後は京都というか近畿地方を中心にいろんな論文を書いていくことになった。ですから私がこの学問に入るきっかけをつくってくれ、民俗芸能の調査という点では本田安次先生であったのですが、研究方法論としては郡司正勝先生や林屋辰三郎先生の影響が大きい。特に郡司先生からは芸能をどう見るか、また芸能の面白さは何かという、本質を掴むってという点で大きな影響を受けました。私にはもう一人、牛尾三千夫という民俗学の先生がいるのですが、今回は割愛します。

◆調査することから学ぶ

吉川 さっき出てきた『西浦の田楽』の中で私が一番感動したのは、シテが出てきて「そも観音の御前に立ちたるものをば如何なるものとかおぼしめす」という詞章で、問いかけて自分が何者であるかを考えさせるというのが、古い能の非常に典型的な名乗りであるという所、あそこは素晴らしいと思ったんですよ。つまり古い日本の芸能の中で、たとえば能をやっている方達には能ばっかりしかやらない人が多いから、その能が変遷してるのに、その過程に注目しないまま見てると思うんですね。

私は山路先生に、本田安次先生が指導しておられた全国民俗芸能大会の舞台の手伝いをしてみないか、と言われてたとき「何をやるのだろう」と思いま

した。山路先生御自身本田先生のお手伝いで、私はその山路先生のお手伝いという形で参加して。それから40年くらいになるのかもしれないけれど。その頃は舞台の下手の方において、同じ平面上で民俗芸能のいろんな形が見られたのは有難かった。舞台に乗せると確かに文化財の破壊にもなるのですけれども、特に本田先生が言っておられたのは、芸能の形がよく見えるという事があると思います。この頃は私は上手の方において山路先生は下手にいますけれど（笑）、その同じ平面で見られたことが、身体動作の方へ興味を持つようになっていった一因なんですけれど、それがとても良かったと思ってるんですね。

先ほど私が羨ましいと思ったのは、学部時代から本田先生のお供をされてたってことなんですけれど、それは本田先生が誘って下さって行かれるんですか？

山路 そうですね、基本的には本田先生が誘ってくださる。それからまた、そういうような調査があると聞くと、「じゃあ私も行かせて下さい」という。もちろん全部自費で行きましたよ。

吉川 そうですか（笑）。

山路 はい。どっかから本田先生が金を取ってきて調査に行くということはなかった。本田先生はそういう事ができない人だったものですから。すべて学問は自費でやれということだった。これは私も、今でも徹底的に受け継いでいますね。

吉川 あと、郡司先生のお供もされたっ

ていうんですけど。私は本田先生とは、そのときは山路先生もいらっしやったのですが、奈良の題目立にご一緒したくらいで、ほとんど一緒には行ったことないんですよ。

我々がやっている日本伝統音楽も芸能の一部ですからね。ただ本を読んでたってどういう風にしていいのかわからない。それで先生と一緒にいくということは、郡司先生がおっしゃってたんですけど、「大学という所は本を読む所ではなくて、先生が何に興味を持つのかを見る所だ」とそんなふうに言っておられたんですね。私もここに来て今年が8年目なんですけれど、こちらでも民俗芸能に興味を持っている人はいるのですが、そういう人がたとえば一緒に連れてってくれとも言わないし、お互い忙しいですから、誘いもしないのですが。やっぱり日本の伝統音楽や芸能を聞くことと見ることにはコツがあると思うんですね。

私が山路先生に徹底的に指導されたのは、私が修士の3年の時で、文献を読むなら『看聞御記』を読みまして、二人で読みました。それから民俗芸能はフィールドに連れてってもらって。東京から行くわけですが、学割だと3500円くらいで往復できた頃ですけどね。山路先生が自分が前に見て記録したノートを貸してくださる。1度に3箇所くらい行くんですけど、現地では指導してもらった。それで私が今でも良かったと思ってるのは、調査に行ってどこに自分の場所をとるかという

のが大事なことです。まあ昔はズームレンズもありませんから私たちは50ミリの標準レンズでしか撮れないんです。あんまりいい場所は神様用の道であるとか、演者がそこを通過してゆく道もあるんですけど、それを避けて、ここが一番良いなっていう所は一応とれていると思うんです。山路さんが昔、「その人がどこに立ってるかで大体力がわかるんだ」と言われたことを、覚えてるんですけどね。私が思うのに、民俗芸能の研究をしている若い人たちが、そういう事をあまり考えなくなってるんじゃないかと思います。

山路 そう。

吉川 その一緒に行って学ぶとかですね。

◆感性を磨く

山路 伝統音楽でも民俗芸能でも、まあ普通の芸能でもそうなのですが、やはりこの方面の研究というのはセンスが必要なんです。だから誰でもができるわけじゃなくて、やはりそういうものに対する感受性とかセンスとかが有るか無いかによって全然違います。ですから有る人というのは、これはおのずと自分の立ち位置というのが自然とわかると思うんですね。自分がどこに立って、どういう形で聞いていれば一番それをまったき形で聞けるか、見られるかということが勘でわかるんですね。だからその場所がわからない人は、始めから止めとけと言わざるを得ない。芸能、まあ音楽もそうですが、芸能と

いうのは感性の問題ですから。今私は、京都で研究会をやって芸能史の若い人たちを指導する立場にあるのですが、そのようななかにも芸能のわからない人がいるんですね。どうしてこんなことがわからないのだろうと思うようなことがあります。

吉川 (笑)

山路 そういう人たちはやっぱり向かない。音楽にしる芸能にしる、初めから感性を持つて人じゃないと、この学問はやっちゃいけないという気がしますね。そういう点で初期の頃の吉川さんは、音楽に関しては本当に鋭い感性を持っていた。しかし、民俗芸能の現地調査に関しては始めてだったし。だからこの人はちゃんとした感性を持っているのだから、民俗芸能についてもある程度言えば、あとはもうわかる人だと思ってたんですね、きっと。

吉川 いえいえ(笑)。私が結局山路さんと一緒に行って、この形…身体動作の形ですけど、「これはあそこにも同じようなものがある」というような事をよく言っておられて、私はどうしてそんな事が記憶できるのかってまず思ってたんですね、その身体動作について。ただ私も民俗芸能の方は早稲田の演劇博物館の助手になった時に、何か紀要の「演劇研究」に書かないといけないということで、一番やさしいものは盆踊りであろうということで、大分県の姫島の盆踊りをやろうと思ったんですけど、そのレパートリーは何か書けないんですね。昔からある3種類くら

いの伝統の踊りとされるものは名前もちゃんとはっきりしてるんですけど、絶えず新しい踊りを作っていますから。会場に来たグループの人で、最初に先頭に来るような人に、「これは何という踊りですか?」って聞いても、「さあ?」って言うだけなんです(笑)。忠臣蔵の世界から採ってるものとかそういうものもあるんですけど、名前が無いんですね。ですけどその、レパトリーが何も書けないところに行ったのがよかったです。それでしようがないから足の踏み方で区別してみようと考えました。一番簡単なのは1人踊りで、全部の人が同じ振りをするものです、それから2人が1組になってる二人踊りとか、3人が1組になってる三人踊りとかがあって。それでその足のパターンを書こうと思ったんですが、パターンっというも私は踊りは習ったことがないから、「①右足を出して」とか、「②左足を出して」とかいうような言葉で書いてたんですけどね。それで郡司先生には「足取り図ぐらい書いたら」って怒られたんですけど。

山路 (笑)

吉川 今考えてみると足取り図を書くということは動作の形を認識してることじゃないと思うんですね。ただそれで踊れるってことなんで。この間も舞踊学会で岡山県の白石踊の現地の保存会の人々が倉敷まで来てくれて、やったんですけども。そしたら舞踊学会の会員はすぐ踊れるんですよ。だけど、その踊る人たちは自分自分で動作を翻訳

したみたいな形でやってるでしょ。そうすると、本当の動作の面白い特徴を持つ部分とはれてないと思いました。私に、センスがあるか無いかは別にして、郡司先生に「君は音楽はやってるんだから舞踊の評論をやったら」と言われましたけれど。子供の時は父親とは一緒にいないんですけどね、10歳から初めて二人だけで一緒に暮らすようになったんですが、今振り返ってみると、ずいぶん素直な子供であったと思うんですね。最初に小学5年の私に父が箏の手ほどきをするわけですけど、近所に同級生がいて、男の子がそんなものをする時代じゃないからすぐ辞めてしまったんですけどね。その後「三味線を習いに行きなさい」とか「雅楽の笛を習いに行け」って。それはみんな父が言ったことです。それに私は全然抵抗しないで行きました。それでやりだすと何でも熱中する方だから1日3時間くらいやってるんですよ。そうすると父親が「そんなことやってたら学者になれない」といって辞めさせてしまうんです。それで何でも6ヶ月くらいで行くのを止めました。この頃振り返ってみると、そういうことなんです。だから山路先生に連れて行ってもらったのも、そういう意味ではね、できないことは仕方ないんだけど、割合素直に行ってたんじゃないかと思うんですね。

私はその点では、まあ山路先生も先生に恵まれてるとおっしゃるんですけど、私はその上山路先生であるとか、

もっと別の種類の先生にもつきました。そのうちの1人が小泉文夫先生（1927-83）だと思っんですけど。小泉先生には音楽の学問を習ったんじゃないで、私があまりにも恥ずかしがりだから、父に「スポーツか音楽をやれ」って言われて。スポーツは全然できないので、小泉先生が、父の教え子の1人だったから無料でヴァイオリンを教えてくれたんですね。でもそのとき14歳ですからヴァイオリンをこれから習うという年じゃなかったのですが。それに小泉先生が日本の伝統音楽から民族音楽の研究に展開してゆく途中だったから、その時一所懸命方法論を考えていたんだと思います。それで私に「周ちゃん、一番大事なことは何が一番大事かを考える事だよ」と言われるんですよね。私は郡司先生にしろ小泉先生にしろ、その時に私に言ってやろうという事じゃなく、自分が考えている事を言うてくださったのだと思います。そういう言葉は非常にインプレッションが強いから、40年経っても50年経っても覚えてるんだと思っんですよね。

ですから私もこの間舞踊学会で、「からだ・トボスとの対話」というシンポジウムで、体が踊る場所、土とか地面に、影響されることについて話したんですけど、そういう時にやっぱり先生たちのおかげというのがあると思っました。それが、個人レベルではなくて早稲田の中にそういうものが漂っていた時代だと思っんです。私もついうっかり、「早稲田にそういう学問が今残っ

てますでしょうか」なんて言っってしまったんですけどね（笑）。我々が早稲田で学んだ頃というのは本当に、日本の芸能の研究の中では本田先生と郡司先生と一緒にいらっしゃって、両方から習えたというのはまことに恵まれていた時代じゃないかなって思っんです。

◆芸能史の二つの流れを融合する

山路 まあそれはね、いろんな大学にいろんな先生がいらっしゃって、確かに私たちは運がいいのでしょうか。伝統音楽ってことにひき付けて考えれば、たとえば私のやってきた芸能史には、先ほどから述べているように、大きく二つの流れがある。一つは文献などを使って研究する環境論ってよく言われますが、文献から芸能を研究してゆく方法。もう一つは、現在に残ったものを分析して、それで研究してゆく方法。でも芸能史においてこの二つというのは、決して別々のものではないですね。うまくそれを融合してゆけば、それなりのものができる。

だから私なんかは民俗芸能プロパーだけを研究している人たちからは、「あいつは伝播論者だ」とか「芸能史の人だ」とか言われるのですが。やはり私のスタンスとしてはそういう芸能史の文献的なもので、その芸能の本来的な姿というのをある程度はっきりと掴んでおいて、それで民俗芸能をみると、その民俗芸能の中で、大きく変容はしてしまっている部分と、そうでない古

い姿の部分がみえてくるわけです。この部分が古くてこれが本質なんだってのが見えてくる。だからこの両方をやらなければいけない。それをうまくミックスしてゆかなければいけないんじゃないかというのが、私の考え方なのです。

民俗芸能のなかの民俗に注目して研究している人たちは、その中の民俗的要素に関心を寄せるから、芸能自体が古いと主張する。たとえば獅子舞を演じるにあたって、その魂を入れる精入れという儀式をやっているから、この獅子舞は非常に古い、古代的要素があるということを盛んに言いたがる。

吉川 (笑)

山路 しかし、そういう民俗的な考え方は、心意伝承として古くからあったということはわかるのですが、それがたとえば獅子頭と結びつくのは、これは年代的にはっきりとわかる。だからそれは別々に考えなければいけない。これは精入れ・精抜きという民俗的儀礼をともなっているから、この獅子頭を用いた芸能は古代から伝承されたものだという言い方はできないと私なんかは思うのですね。

その点、伝統音楽のほうに振り返って考えると、一つの考え方としては、岸辺成雄先生とか平野健次先生などがずっとやってきた、文献をしっかり押さえてゆく流れがある。私は、これはそれなりに大切なんじゃないかと思うのです。それとは別にもう一つ、たとえば伝統音楽の美学から入って研究す

る立場。吉川さんのお父さんである吉川英史先生などもそうですが、それから小泉文夫先生みたいに、音楽というのは今残っているものが重要なので、これを勝手に遡らせるわけにはいかないってことで、あくまでも現在自分で収集した音だけを信じて研究を進めていくやり方。何かね、芸能史とは違って、伝統音楽の研究はそのような幾つかの流れが、うまくミックスができていないのではないかなと思われる。私は伝統音楽研究の専門家ではありませんからわかりませんが、そのような印象があります。

◆伝統音楽の全体像を

山路 伝統音楽研究というと、どうしても一般に古典芸能と呼ばれている芸能の音楽を研究すると思われがちですね。若干、民俗芸能の音楽も含めて研究されているのだとは思いますが。この研究センターにはそういう古典芸能のそれぞれのパートを、非常に深く研究されている方はいるのでしょうか、じゃあその伝統音楽の全体像をお考えになっている方がいるのかとかですね。この研究センターは京都市の施設ですから、京都が日本文化の発信地であったという自負があって、それ故に京都の音楽を研究していくことが、日本音楽を研究することになるという思いがある。私は京都に残っているさまざまな、民俗芸能も含めてね、そういう音楽の研究をして成果を上げているのなら、

それはそれでよいのだと思います。ただ、その成果を、伝承している人たちを含めて、どのように京都市民に還元しているのかということですね、センターとしてまとまって。私が外部から拝見していると、研究員それぞれが自分の興味で研究をおやりになっているようにも見える。市民の税金を使って自分の興味を解明していると誤解されたいけない。

私自身は、自分の学問はすべて趣味から始まっていると思っているんです。だからその自分の趣味を解明するためには、自分のお金でやるべきだと。ですから私は頼まれた場合は別ですが、よそから金を取ってきて研究するという事は一切しておりません。これは自分の興味から始まったのだから、自分の金でやるべきだというふうに思っています。ただ、国というのは、そういう成果を公にする為の出版助成をして、後世に残しておくべきだとは思っていますが、自分の興味から出発した研究は、自分の費用で行うべきだと考えています。ですから文科省の科学助成なんかも含めて、理科系の人たちはそれを使って良い研究をしているけど、文科系の人たちで、特に文化人類学などの人たちが、何千万いう金を使って外国に調査に行っていますが、それに対して簡単な報告書しか出さないなら困るわけです。研究者は、成果をどういう形で日本の国民に還元するのかということ、また、その原資が税金からも賄われていることにあまり頓着しない。

私はそのようなことに常々首をかしげているのですね。

それは京都市の研究機関でも同じなんだと思います。たとえば同じ京都市でも、染職試験場などの場合は、京都の産業である染職に関する研究をやり、それを京都の産業に還元している。これは完全に京都市としては必要であり、市民の税金を遣っても納得がいく。しかしこの研究センターに関しては、そういうシステムがまだできていないのではないか、というよりそのような自覚がどこまであるのか。やはり京都市が運営している以上は、京都から発した様々な音楽を研究しながら、半分はそれをどう市民に還元してゆくのかという視点がなければ、私はこういう施設は駄目なんじゃないかと思っておりますね。ちょっと厳しいかもわかりませんが。

吉川 そういう視点が無い訳ではないんですが、わかっていただくのは難しいものですね。センターでの取り組みについてはあとで補足させていただきますけど、私もこの頃独立行政法人国立文化財機構の評価委員をしています。東文研、東京文化財研究所の芸能部（現無形文化遺産部）が何のために作られた機関なのかは、我々は前から接触はあったけど知らないような状態だったんです。伝統的なもののうちの無形の文化を保護したり、それから発展させたりする事が、あちらの使命として書かれてありますよね。

◆何をどう研究するか

吉川 この初代所長の廣瀬量平先生は、京都市立芸大の音楽学部長もなされて、名誉教授であって、それで有名な作曲家なんです、先生は結局「作曲する上でも洋楽だけやってたのでは底が浅い」と思って「日本の事を研究しなければ駄目だ」とおっしゃってたんです。では日本伝統音楽のどこをどのように研究すればいいのかという事についてはお示しにならないまま、ここをお離れになったんですけれど、でもお話をうかがっていると、このセンターでは単科大学的な音楽だけの研究では駄目なんだ、とっておられた事は確かだと思うんです。ここの設立の趣旨にもありますけれども、「日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究する」と書いてあるんですね。ところがそれは、言葉の上では非常にわかりやすいんですけど、どこをどのように研究してゆけばいいのか、なかなかわからないんですね。

私はこの機関ができて2年目に来ましたから、名称とかにもまったく関わっていないんですけど、このセンターの名前に「日本伝統音楽」って付いているのが、私は素晴しかったと思うんです。「何で日本伝統っていうのか」ということに、疑問に持つ人もいるんですけど。それは私の父親なんかの世代までは田辺尚雄先生でも、私の父親である吉川英史も、『日本音楽史』という本を書いているけど『日本伝統音楽史』って

うことは書いてないんですね。私は小泉先生に、そういうことについて教えてもらったことはないけれども、要するに、日本音楽というのは中心がいわゆる「邦楽」である、近世邦楽が主たるものである、というふうになってしまいうんですね。それだけでは私はその、日本の伝統文化を研究することはできないと思うんです。

私は専門的には身体動作のことを考えてるんですけども、たとえば舞踊とはいえないような、奄美のユタは神がかりをした結果走ってる、とか意識ではコントロールできないような身体の動きが舞踊と関係してくると考えています。今世界の最先端をいっている舞踊家は、この間京都賞をもらったピナ・バウシュだと思いますが、その人も団員さんに「あなたは何故踊るんですか」ってことを問いかけているんですね。そしてその為には自分の全部をさらけ出すことを要求していて、奄美のユタも結局自分のすべてをさらけ出さなければならないということで、共通していると思います。そういう時におこってくるのは、自分が踊ろうとかいう意思のある動作ではなくて、無意識におこってくる痙攣だとか、はじめは体の一部分が動き出してやがて立ち上がる。

本田先生は私が授業をとって、先生が「立ち上がる」という時にいつも右手を上にあげられるんです。それは何故だろうっていつも考えてたんですけど、やはり立ち上がるということが

舞踊にとって非常に重要なものだと考えるようになりました。特に座っている文化の社会ではですね。そういうのがさっき申したように、私が早稲田で学ばなかったらそういうようなことをそれほど重要だと思わなかったろうし、自然にそういうような所に目がいつてしまうというような所が、早稲田で学んでとても良かったと思うんです。それでそういう所まで考察が進めば、日本に残っている伝統的な口承文芸のものとか身体動作は、私は世界的な、世界の人類の文化遺産であると思うんです。

そういうことを研究していて、大分県の姫島の盆踊りを調べたときに、非常に小さい島をインテンシブに調査しているわけですけど、その中から一般的な法則として、盆踊りの足の動作が、日常の歩くという歩行の動作とどこが違うかということがわかってきた。それはボンアシ（盆足）という言葉でそこでは言うてたんですけど。左足から動かせば、左・左・右・右と同じ足を2度続けて動かすのが特徴で、歩行は左・右・左・右と交互に動かすだけなので、そこで日常の歩行の動作とは異なる、踊りの足の動作という一般的な法則を発見したと思ってるんです。こういう問題意識は足取り図の作成からは出てこないでしょう。

だから私は、2008年の3月で辞めてしまうんですけど、ここの3代目の所長とか、それから残っている所員の人が、結局日本の伝統音楽を広く調べる

事によって、世界の人に、音楽とは何かということの答えは、すぐには出てこないかもしれないけれど、そういうものを探すところの機関ではないかと思うんですよ。で、山路先生が言われたように、そのためには、たとえば身近に接触できるものをやらないと損だから、ここでは「京の芸能」とかかって、祇園囃子だとか六斎念仏を取り上げてるんですけど、そうした意識が、有るか無いか非常に分かれ目のところだと思うんです。だから京都の人に還元するんだけど、ここの機関が日本に一つしかない、日本伝統音楽を考える公的な機関ですから、やっぱりそこを考えた方がいいのではないかって、思ってるんですね。

山路 あの今「伝統音楽」って言葉が出ましたが、確かに古い人たちは「日本音楽」といって近世邦楽を中心に考えていましたが、小泉先生は「伝統音楽」という言葉を使っていますよね。

吉川 ええ、ええ。

◆伝統と熱狂、そして感動

山路 そういう点では小泉先生あたりから、単に「邦楽」イコール「日本音楽」ではなくて、もうちょっと広い意味での「伝統音楽」という意識が強く出てくる。私などが携わっている芸能史でも同じで、現在残っている古典芸能を研究するのが芸能史だった時代が長く続いた。そういう時代を経て、現在

我々が考えている芸能史は、もっと幅が広い。

日本人は長い歴史の中で、多くの芸能や音楽を育んできました。芸能が人々に与えた力、音楽が与えた力、人々の生活のなかでですね、これをやはり大きく考えて問題にしなくては行けない。その場合、たとえば現在に古典として残った芸能だけが芸能ではなくて、平安時代とか鎌倉時代、すべての時代において、その時代の民衆が熱狂した音楽・芸能があるはずであると考える。ところがそういう芸能や音楽というのは、次の時代になると捨てられていくのですね。

でもこの捨てられてしまった芸能や音楽というものを、研究していかないと日本芸能史にはならない。日本音楽史にもならないと思うのですね。音楽の場合はそうやって捨てられてきたものを研究するのは無理だっていうかもしれませんが、やはりそれを明らかにしなければ日本芸能史とはいえないし音楽史とはいえない。たとえば私が一番すごいと思ったのは、尾崎豊というシンガーがいましたね。もう10年以上前ですか。あの方が死んだときに、若者たちがものすごく悲しんだ。大量の若者が悲しんだ姿というのに、私はショックを受けたのですね。これほど音楽というものは人々に、ある世代の人々に力を与え、影響力を持っているんだと。ただ、今、尾崎豊が死んで10年経って、尾崎豊を知っている若者がどのくらいいるかとなると、必ずしも

多くはない。これが50年100年経ったらたぶん無くなってしまおうでしょう。基本的にある時代に変なインパクトのある芸能とか音楽が生まれたとしても、どんどん捨てられてきたと思う。しかしこういうものを見つけだして繋いでいかないと、本当の意味での日本芸能史にはならないし、音楽史はできないというふうに思っているんですね。

ところが、芸能とか音楽っていうのは、流れる水に字を書くようなもので、演奏するそばから消えてってしまう。残るのは「あれは素晴しかった」という、そういう感想や評判だけなんです。だから実態がわからない。じゃあ実態がわからないからそれを無視していいかという、決してそうではない。やはり、少しでも実態を明らかにして、何故それに人々が熱中したのか、人々が感動したのかってことを、きちっと考えておかなければいけません。民俗芸能のなかにはそういうものの破片が残っているわけなんです。だから、民俗芸能を研究するというのは、そのためでもあるのです。今の民俗芸能で、演技自体に感動するものはそう多くはないんですけど。しかしそういう感動がないにしても、その中に残っている芸態とか音楽というのを、それぞれの時代のなかに置いて、それを還元してみても、当時の人々が何故これに感動したのか、感激したのか。そのへんの事を解明してゆくのが芸能史であり音楽史であり、また伝統音楽と言った場合の、古典と言わないで伝統といった場

合の研究ではないでしょうか。ですからそういう点では、民俗芸能というのは、日本の音楽史・芸能史を考えてゆく場合の資料としては、たいへんに重要なものなのだと思うのです。ただその場合も、今残っているものだけを研究するのではなくて、流れとしての、時代の流れ、社会史的なものまでを含めて考える必要がある。そのような視点を持つことでそれぞれの民俗芸能の歴史的位置づけも分かってくる。歴史的な事ばかり言ってすいませんけど。

吉川 いえいえ。

山路 伝統音楽史的な解明はある程度できるのではないかと。その為にはやはり今のものをちゃんと調査することが重要ですよ。それが基本ですから。民俗芸能にしても古典芸能にしても、調査をする時に、ただ調査をするのではなくて、そういう目的意識を持って研究・調査していかないと、その調査結果がうまく生きてこない。調査が調査で終わってしまうことがあるのでね。

吉川 今のは、とっても示唆に富む言葉だなと思います。たとえば、郡司先生も「風流旋風」といって、戦国時代くらいから近世にかけての、踊りに熱狂したことを捉えていますよね。私はこの頃、「よさこいソーラン踊り」なんかが流行っているのは、「ええじゃないか」もそうだと思いますが、社会に何か皆が口で言えずに溜っているものがある時代には、言葉に先行して体が動いてるんじゃないかって思います。だからそれを芸能史的に研究したことは

無いけれども、やっぱり音楽にしる踊りにしる、熱狂的にピークに達したものを全然無視していたのでは、わからないのだということを今思うんですね。

◆民衆の芸能と共同体

山路 室町時代に何故風流踊りが起こってくるかという、それ以前の芸能というのは、基本的には民衆が自ら演じる芸能ではなかったといっているのですね。

吉川 ええ。

山路 それまでの芸能というのは専門の芸能者が演じていた。ところが鎌倉時代末期から南北朝の戦乱を通じて、民衆が経済力を持ってくる。また、自分たちの地域や職能集団が結束力を持ってくる。そういうなかで民衆が、自分たちの為に、たとえば雨乞いか先祖供養とかですね、自分でお金を出しあい、自らの目的のために踊るということができるようになる。これが大きく広がるのが、室町期なんですね。そういう背景が整うと、民衆は自分たちの思いを爆発させます。

民俗芸能というのは、一人で演じるのではなく、共同体が目的を持って、思いを一致させて演じなくてははいけません。その代表が風流踊りなのです。正月とか祭礼とかお盆とか、そういう時に一つになった共同体が、自らの意志で自分たちのために演じる。あれはスポンサーがいるわけではないです。それ以前の雨乞いなどは、荘園の領主

など収穫を収奪する側がスポンサーとして費用を出した。それに対してこの時代は、自分たちのお金で、自分たちの感情を爆発することのできる、そういう芸能が風流踊りだったんですね。それができるようになったのが、室町時代っていう時代ですから。現在も同じような時代情勢なのですが、目的を同じくする共同体がない。

ただ戦後、個人というものが重要視され、共同体というものが軽視されてきました。それに対して、若者たち個々が持っている不安感とか、一緒になって何かをやりたいという気持ち、最近になってまた反動的に出てきている、そういうものをうまくとらえた仕掛け人がいた。それが和太鼓であり、よさこいソーランなんですね。

ただしそれらは音楽的にいえば、基本が西洋音楽なんですね。明治以降、日本の若者たちは学校では西洋音楽しか教わってこなかった。表現したり、共鳴したりできるのは西洋音楽になってしまっていた。よさこいソーランとか和太鼓とか名前は一目伝統的なものの再登場のようにみえますが、実体は西洋音楽ですよ。ただし和太鼓のグループは、自分たちの地域の歴史と結びつけた解説をし、伝統的なものであることを標榜したがる。よさこいソーランにしても、やはり高知市の「よさこい節（踊り）」とか北海道民謡の「ソーラン節」とか、一目伝統的なものを基調としている。しかし西洋音楽ですよ。今の若者たちは学校教育によっ

て西洋音楽に慣れきってはいるが、またそうでなければ共感できない環境なのですが、しかし、日本的なるものへの回帰もある。その回帰をどう従来の伝統音楽と結び付けていくのかが、というのが重要な問題だと思うんですが、なかなか難しい。子供の頃から学校教育で西洋音楽を1から10まで教えてしまっている。学校教育だけじゃない。お母さんの子守唄から保育園の音楽まで、ほぼ全部が西洋音楽になってしまっている。そういうなかで、日本の伝統的なものを、日常生活のなかで復活させていくのは大変に難しいですよ。しかし、嬉しいことに、民俗芸能の盛んな地域においては、まだ子供たちは民俗芸能の音楽を小さいときからやっているんですよ。

吉川 そうですよ。

山路 われわれ都會育ちは、そういう環境が無いから、完全に西洋音楽で教育された。しかし、民俗芸能がしっかり地域で傳承されている地域においては、伝統的な笛、伝統的な楽器が普段に演奏され、小さい頃から実際にその環境の中で育っている。このあたりがまだまだ一つの拠り所となる可能性を残している。学校がどんなに西洋音楽を教えても、やはり地域の音楽、地域のそういうものがしっかりさえしていれば、まだ伝統音楽的な音の感覚が残っている。それを大切にしていきたいという気がするのですがね。舞台芸能や専門家の芸能は別として、民衆における伝統音楽の、そのへんのところを学校

教育などが、うまく使って教えてくれると、日本人の音感を再び取り戻す拠り所になるのかなという思いはありますね。

吉川 今のお話に関連するのは、日本では、小泉先生も言っておられますが、日本のもともとの音楽はものすごく虐待されているところだと思うんです。この頃、新国立劇場の、たとえばバレエ公演とかオペラ公演なんかに行ってみますと、バレエのほうはかなり水準があがったと思うんですけど、オペラのほうは声を出して演じなければならぬ。で、歌の部分が学校で、西洋音楽は習ってるんですけど、日本人の声楽的な発声法はまだできてないと思うんです。フランスだって、イタリアのベルカントとは発声法が違うしドイツもそうだと思うんですけどね。それがもしできたらもう日本の伝統音楽は止めちゃってもいいんだけど（笑）、そうはなかなか。

山路 止めちゃってもいいって言われるとちょっと困る気がするけど（笑）。

吉川 いや、それができたらですよ（笑）。それはなかなかできないんだから。2006年と2007年と関西の芸術祭の音楽を聴いて回ったら、地歌箏曲というところでも、もう西洋的な発声が無いような人を探すのが難しい時代になったんだと実感したんですよ。で、西洋的な発声法で地歌箏曲をやってみても、感動できないようなものがあるし。それからまた尺八も、もう非常に西洋人もたくさん参加してます。しかし、

尺八音楽としての迫力を出すのはむずかしいんだと思いました。

◆伝統とは何かを自問する姿勢

山路 日本音楽も、そうやって全世界に発信して行って、相撲がどんどん外国人が入ってくるように、そういう方向に行くのもいいですが、もう一つ、それがどんどん進めば進むほど、純粋な伝統音楽を残しておかなくてはならないと思うのでね。ただ私はね、そう心配はしていない。それは若者のなかにまだまだオタクがいるって事なんです。

吉川 （笑）

山路 そのオタクの人たちが、日本的なる、その西洋音楽とは違う日本的な音階や、日本的発声を、きちっと気づいてくれている。少数ですがそういうオタクの人たちによって、ちゃんとした日本の伝統音楽を守ってくれる可能性がある。舞台などではしっかりと残してくれる可能性がある。それから一番重要なのは、やはりその底辺である民俗芸能も含めて、民俗芸能もどんどん西洋的なものが入ってはきていますが、まだまだ厳しく伝統的なものを教えている地域もあるので、こういうものは絶対に残してほしい。

そういうところを核にして、やはり地域の活力によって西洋音楽ではない日本的な文化、日本的な音楽文化っていうものを、構築し伝承して欲しいと思うのです。この研究センターなどもそれを支援するような研究や活

動が出来ればと思うのですがね。民俗芸能にはまだその可能性が残っているという気がするんですね。ただ問題なのは、そういう民俗芸能の指導者に、西洋的な音楽感覚を持った人たちが入ってきてしまっている。

実は京都の六斎念仏でも、子供たち非常に熱心に教えている人がいるのですが、そういう人たちが果たして本当に伝統的なものとして意識、自覚して教えているか。ひょっとしたら五線譜を使って教えちゃってるのじゃないかと心配する。五線譜というのは非常に便利ですし、若者たちもわかりやすい。しかし、体から体へ、口から口へ伝わっていくという本来のトラディショナル。「手から手へ」伝えられてきた伝統が変質するような気がする。五線譜を一度通すとね。民俗芸能の指導者にはそういう自覚をきちっと持つてもらいたい。一寸古いですかね。

吉川 それで今このセンターでは、昔の、明治くらいからのレコードが残っているのを鑑賞してるわけですけど、私なんかと思うのに、たとえば三味線の演奏があった場合に、どうしてもマイクを通して、録音したりするので、言葉を聞き取るために、どうしてもバチの音をどんどん小さくしていつてしまっているように思うんですね。だから、たとえば三味線という楽器には、打楽器としての性質もあり、メロディを弾くだけの旋律楽器ではないんだっというように、その楽器の使用法も西洋音楽とは違うと思うんです。それが

西洋の方ではですね、古典楽器を使ったりして、作曲された時代の古典的な様式の演奏をやろうとしていたりします。あるいは、アーノンクールという人が言ってるのは、音楽史でいったら、バッハとモーツァルトが天才であるということで、あるオランダ人は、バッハの無伴奏チェロソナタに取り組んでいて、「他の曲はもう弾かない」といつているんですね。私がこの伝統音楽研究センターに来て、少し寂しく思うのは、日本の伝統音楽の伝承者の人が、それこそプロなんですから、「古典的なスタイルではこういうふうには弾けるけど、私はこう弾きます」という意識があるのかどうかなのですが、無いように思うんですよ。それで「伝音セミナー」で自分がしゃべった時に、小泉文夫を取り上げてみました。彼が結局日本の伝統音楽にあこがれたのは、先が読めないってことであこがれたわけですね。私とちょうど12歳違いましたが、14歳の私に、「もうクラシック音楽は全然面白くない」、「クラシックは先が読めるからだ」って言ってたんです。それが彼が24歳の時で、彼がインドへ留学する前だったんですけどね。そういう良さは、日本音楽にあるけども、この頃の新しい作品を聴いてると、先が読めるものが多いですね。

山路 はい。

吉川 そうなっちゃうと、日本の伝統音楽なんてそれこそ西洋のものに比べれば、早く言えば和音もあんまりたいしたことはないし、チャチかもしれない

んですね。でもそれがそうでない、意外な展開がする。たとえば三曲というのだって、「三曲合奏」っていってしまって、最初から一人の人が作曲してればそれでいいですけど、はじめに三味線の曲があって、それに箏をつけてっていうふうにしていってるんだから、やっぱりそれは一人一人の演奏者の立ち会い勝負だと思うんですね。でその立ち会い勝負というのは相手の音を聞き、自分の音も聞いて、次の音を加減して演奏するのが本来の日本音楽なんだと思います、それが今はずうっと予定の通りのような音になってると思うんです。

◆音声資料と芸能

山路 西洋にもそういうような演奏の仕方は当然あるわけですが、音の研究っていう意味では、先週の土曜日（2007年12月1日）に、藝能史研究会の東京例会があって、その題名は「音声資料と芸能」というものでした。大正時代の音の研究だったんです。基本的には、マイクロホンを使わない、ラップであった時代のレコード、特に大正の。それも歌舞伎のレコードと、文楽のレコードの音声研究だったのです。その音を実際に聞かせながら発表をしてもらったのです。たいへんにオタク的な発表でした。一人はレコードのコレクターでもある大西秀紀さん、もう一人が文化財研究所でレコードを扱っている飯島満さん。飯島さんは文化財研究所

の安原コレクションを全部聞いた人ですから、ともに一種のオタクといえる。そういう人たちが「西洋音楽の入らない以前の音」というのを一応大正時代に限って、レコード自体は明治の終わりから始まるのですが、大正に限ってレコードの音を聞かせながら色々蘊蓄をかたむけたんですね。私も実は大学を出て最初に東京国立文化財研究所に嘱託でいた頃に、安原コレクションの邦楽を聞いていて、松永和風とか、古い時代の長唄などを沢山聴いたわけです。全然まだ西洋音楽的教育を受けていない、そういう長唄ですね。あれは私の芸能感を考えていく上で、特に日本の芸能ってことを考えていく上で、非常に重要だったですね。やっぱり彼らのあの時代の演奏というのは、自分たちが師匠から身体で教わったものをそのままやっている。「えっ、これが長唄」って、現在私らが聴いてる長唄と全然違うものですからね。だからそういうものの研究は、その音が録音されていたからできるわけですよ。芸能史研究でも、そういう研究をやっていかねばならない。

私は今回の東京例会は、お客さんが来ないだろうと想定していたんです。でも、誰も来なくてもこの例会はやらなきゃいけないと考えていた。あえて挨拶のときに言ったんですが、「今回は参加者が少ないかもわからないが、藝能史研究会としては、映像にしても音にしても、残っているものは、やっぱり研究の対象にしていかなければいけ

ない」。これまでおざなりになっていたから、その研究方法を模索する意味も含めて。そういう時にここのセンターの人たちが一人もいなかったのは、やはり若干寂しい気もするのですけど。

吉川 当日私は舞踊学会で発表していたので(笑)。仰るような研究方法は、音楽学出身の研究者やこのセンターの所員でも大切に意識している人がいますし、そのあらわれとして、センター全体として、SPレコードの音源をインターネットで無償で提供するようなことをようやく始めたんです。今のところ、700枚程度の音源公開ですが。

山路 そういう研究もいよいよ本格的に始まるのでしょうか。

吉川 今のお話を伺って思ったのは、センターの研究員は芸能関係のいろいろな学会に顔を出して、さらに情報を集めた方がいいということですね。山路先生が言われたみたいに、センターだって多少は資料を持ってるのだから、SPレコードは「全部聴いてみよう」とか、そういう気がないと勿体ないと思うんですね。全部聴くと何かが出てくると思います。だから私はたとえば「伝音セミナー」という、レコードを聴く会を立ち上げるときに、解説なんかいらなから、とにかくざーっと、アトランダムでもいいからまずは聴かないと、と思いました。一つ一つの事に対して説明したり何かしてたら時間をとられてしまう。古いレコードは1曲しか聴かせられなかったりするんですよ。だからそういうことじゃなしに、

あるものの資料は無視することはできないんだから、とりあえずそういうのを全部聴いてみるとかしないと本当に勿体ない。本だって全部は読めないけど、バラバラとめくってみるだけでも発見することがある。

山路 さきほどの東京例会で面白かったのは、大正期はラッパ録音だから、ラッパの前に行って音を出さねばならない。そうすると三味線と義太夫だけを録音した音楽のレコードになってしまう。芸能のレコードではないのですね。飯島さんは、太夫と三味線と人形遣いが、舞台上で格闘する芸能としての音でないといけないというのですね。舞台の実況中継というのが非常に重要なんだと。舞台の実況中継が実際に始まるのは戦後なのですが。たとえばその舞台の録音を聴かせてもらうと、完全に義太夫の語りの間に、人形遣いの足音が入るんですよ。相当大きく。そうするとその足の音によって人形の動きが想像できる。そうすると音楽がどう変わっていくか。音楽だけを聞かせる、いわゆる素浄瑠璃とどう違うのかとかね。彼は「取りかかったばかりで結論は出ませんけども」と断って聴かせてくれたのですが、やはり芸能研究の将来をかいま見た気がして面白かったですね。

吉川 長唄の「勸進帳」で明治30年代後半のレコードがありますが、役者のセリフは、たとえば山伏問答とかみんな抜いてあるでしょう。それは長唄研精会の人たちが劇場から離れた段階の、

みんな抜いちゃった長唄も同じなんですよ。東京芸大では、そういうものを教えているでしょ。

山路 はい。

吉川 で私がさっき申した、三味線のバチの音については、たとえばこの頃、津軽三味線は歌を無くしてる人が多い代わりに、そのバチバチと大きなバチ音をたてて弾く。津軽三味線の専門雑誌の方も『バチバチ』っていう名前がついているところを見ると、やっぱり三味線の音楽にはバチの音が必要であったのに、何かこの頃無視されているように思うんですよ。ここのセンターの人なんかでも、いろんな種類のものを聴いて、山路先生が言われたみたいにもまずあるレコードは全部聴いてみるぞとかいうふうな、意識を持たないと、市民に沢山還元できるようなところにいけないかもしれないと思います。

◆市民還元と自己点検

山路 まあね、その市民還元の問題と、研究の問題というのは非常に難しいんですが、大学の先生っていうのは、ある意味教える事で給料をもらっていますから、研究に対して給料を出すというよりもやはり教えるという事が中心ですよ。それに対して、私もあなたの前に、国立文化財研究所が独立行政法人にかわった後の5年間、その評価委員をやっていたのですが、結局、独立行政法人化でどう変っていったかという、文化財研究所はもちろん研

究機関ですが、基本的にはそこで研究した様々な成果を、どう還元していくかということが重要なのですね。たとえば市町村レベルの、文化財関係者に研究成果の新しい知識をどう教えていくか。そういう人たちに呼びかけて講習会を開いてはいるのですが、考古学の方面はそれが巧く機能しているのですが、無形文化財はなかなか難しい。

結局、自分たちの研究成果をいかに一般に還元していくか。それを中心に考えていかないと、この研究センターの存続意義も無くなってしまうと思うのですね。税金使って自分としては研究成果があがったけれども、それがちっとも還元されないとしたら、公立の研究機関としてはどうだろうかと思うんです。ここの設立に尽力された廣瀬先生は「研究、研究」と仰って、確かに研究がとりあえずは必要ですし、ここ10年くらいは研究の時代だったのかもわかりませんが。やっぱりこれからは、その研究成果を京都市民、場合によっては日本国民に対してどう出していくかというのが、これからのこのセンターの大きな課題なのではないかという気がしますけどね。

吉川 公開講座やセミナー、出版物の配布は、その多くを無償で行って、研究者だけでなく市民にも還元してますし、そのあたりは公的機関から受けている外部評価でも意外に高く評価してもらっているようです。でも、まだまだ広く認めて貰うのは難しいですね。今は京都市がこの面倒をみている

わけですが、独法化というのがいろんな国公立大学で進められてますよね。そういうふうになった時に、費用対効果みたいな、どのくらいお金を使ってどんな成果をあげているかが評価のポイントになるのでしょうかね。

山路 それは当たり前なのですよ。

吉川 早稲田の演劇博物館だって研究機関だけど、全部事務職みたいな形で身分はなってたんですね。だから毎日出勤する。私みたいな教員待遇の助手でも、別に拘束はされてなかったはずなんですけど、同様に朝9時から4時までの拘束っていうか、そこにいないといけなかった。演博だったら学芸員は、閲覧係をやっている時だけ自分の好きな本を読んでよろしい、というだけしか自由はなかったんですね。郡司先生が、山梨県の天津司人形の調査に行かれたときに、館長の河竹繁俊先生に怒られたっていう話を聞いてますけどね。だから恵まれた研究機関は、今は無いということ…。

山路 いや、早稲田大学は私立ですからね、大学の方針でここは研究所なんだからって言えばそれはそれでいいのですが、少なくとも公立の場合は違いますよね。

吉川 そのところを、所員はいつそう自覚していった欲しいですね。

山路 はい。私の知っている京都市民も言っていましたけど、外部からプーイングのようなことが出ないようにしていかないと…。

吉川 たとえば、市民を対象にした公開講座等でアンケートを書いてもらって、

具体的な要望を集めて次の企画に反映するようにはしています。そういう努力と工夫をもっと行うべきでしょうが、ぜひセンターに直接ご意見を寄せていただけると有り難いです。今日は、山路先生にその代弁者として来ていただいて、耳の痛い話を伺っているわけです。

山路 いえ、ちょっと言い過ぎた気はするのですが。すいません。

吉川 いやいや（笑）。よその研究機関でも、山路先生のそういう意見を聞いたことが役に立ってるって言ってるわけですからね。今この大学全体で、公的な外部評価を受けながら、まさに自己点検に真剣に取り組んでいるんですけど、他人の意見に耳を傾けて自分を見直すことをしないと駄目だと思います。今日はとってもいいお話を伺いまして（笑）。

山路 ありがとうございます。失礼いたしました。

吉川 長い時間いろいろなお話をお聞かせ下さいまして、ほんとうにありがとうございました。

エッセイ

定年に思う

久保田 敏子

大抵の職場は、一定の年齢に達すると退職する決まりになっている。その年齢はまちまちで、企業では早いところで55歳と聞くが、60歳の誕生日迄というのが多いようだ。しかし、最近では、65歳という企業も少しずつ増えてきているということだ。

大学教員にも定年がある。昔の国立一期校は概ね63歳、その他の国公立の多くは65歳のようだ。長い例は東京芸術大学の68歳、短い例は、つい近年までの東京大学が60歳と聞いていた。定年後に引く手あまただから、というのがその理由だそう。私学となると68歳から73歳位迄まちまちであるし、定年の無い大学もあると聞く。ここ京都市立芸術大学の定年は65歳に達した年の年度一杯である。

しかし、定年に達したからと言って姥捨山の話ではないが、余人をもって替え難い逸材もあり、誰もかも一律に線引きすることにも一考の余地があるかもしれない。50歳を過ぎると、個人差が大きくなり、実年齢はあまり問題でないことが多くなる。政治家をはじめ学者や文人、芸術家などには70歳を越えてもおお豊饒として第一線で活躍されている例は沢山ある。

私自身も、学生時代からの恩師・岸辺成雄先生には、92歳で亡くなられる間際まで、色々のご指導を仰いだし、実演家の菊原初子先生にも、100歳になられても何の

かんのとお教を乞うていた。現在も、貴重な事柄をしっかりと伝えておられる京都箏曲界の長老で95歳の山口琴榮先生には、つい先日もご指導を仰いばかりである。記憶力は勿論、演奏も拔群である。

私などは、この年齢になっても、まだまだ教を乞わねばならない状態であり、相田みつをの言葉ではないが「一生勉強」を実感している。

しかし、この定年という節目の年にちょっと立ち止まって広い視野から自分自身の置かれた状況を考えると、やはり、「定年」は良くできた制度で、不可避の施策であると思う。近年は、博士課程を置く大学が増えた結果、博士号取得者が増加し、研究職を希望して空席を待つ、いわゆる博士浪人が、かなりの数いる。そうした状況を考えると学問の世界でも世代交代は必要であろう。私も、定年後は「老害」をまき散らすこと無く、若い人々から刺激を貰いつつ、ゆとりを持って、身の丈にあった研究に取り組みたいと思っている。

そう思っていた矢先、次期所長予定者という大任を仰せつかることになった。思うに、所長という職種は決して上に立つ役職ではなく、部所の表札替わりの板っぺらみたいなもので、コーディネーターの役を担う職種に過ぎないと考えている。

思い返せば、この日本伝統音楽研究センターには、立ち上げの構想段階から関わってきたご縁もある。これからも、センターの研究が様々な形で結実し、広く市民に還元出来るよう、老骨に鞭を打ちながら、皆さんと共に智慧を絞りあって研究に取り組んでいきたいと願うこの頃である。

センターニュース

平成19(2007)年度

人事・採用及び異動発令

◇平成19年4月1日

非常勤講師 上野正章(新規採用)

非常勤嘱託員 木村知美(新規採用)

◇平成20年3月31日

所長 吉川周平(退任)

教授 久保田敏子(定年退職)

非常勤講師 奥中康人(任期満了)

非常勤講師 龍城千与枝(任期満了)

非常勤講師 横山佳世子(任期満了)

非常勤嘱託員 小城篤子(任期満了)

非常勤嘱託員 末松憲子(任期満了)

学術出版物

◆『日本伝統音楽研究』第5号 日本伝統音楽研究センター研究紀要

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2008年3月31日、B5 2段横組 148pp.

内容：◇論文 小野真：浄土真宗と音楽、廣井榮子：豊竹呂昇の再評価—呂昇の音楽活動における「娘義太夫改良論」の意義と問題点—

◇研究ノート 上野正章：未完の美学書としての『日本音楽の性格』、竹内有一：古曲保存会のレコード制作—大正中期の町田嘉章による近世邦楽研究—、龍城千与枝：音曲における音(オン)に関する研究—『音曲玉淵集』にみる「音」と「聲」の区別を中心に—

◇調査報告 田井竜一：京都祇園 放下鉦の囃子

◆『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽—』日本伝統音楽研究センター研究報告1

久保田敏子・藤田隆則編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、2008年3月31日、B5 横組 160pp. (2004～6年度プロジェクト研究「教育現場における日本音楽」の成果)

◆『詞章本の世界—近世のうた本・浄瑠璃本の出版事情—』日本伝統音楽研究センター研究報告2

竹内有一編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、2008年3月31日、A4 二段縦組 約90pp. (2005～7年度共同研究「詞章本とその出版に関する研究」の成果)

その他の主な出版物

◆『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報』第9号、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2008年3月31日、A5 60pp.

◆『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター』(概要2006年版)、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、B4 変形観音折

公開講座

(前年度の補遺)

◆平成18年度第3回公開講座

「地歌箏曲の楽しみ～レクチャーと明日を担う各派若手演奏家による魅惑のひとつとき～」

日時：2007年3月17日(土)午後2時～4時

場所：京都芸術センター大広間

入場料：2000円（当日受付のみ）

監修：久保田敏子

レクチャーおよびプログラム解説：

井口はる菜・久保田敏子・中井猛・
野川美穂子

主旨：同年度開催の共同研究「演奏研究—地歌箏曲—」の成果を、公開講座として発表するものである。古典曲の伝承は、音進行や技法、曲の寸法等、流派や芸系によって細部では驚くほど異なる伝承が行われている。しかし他の系列の者にとって、それをじっくりと知る機会がほとんど無い状態である。この研究会では、そうしたことを検証し、芸系や芸筋による伝承の異同を確認し、今後の各流交流の理解につなげる結果を得た。その成果をもとに、演奏会用にセレクトして構成したのがこの公開講座である。

前評判を聞いたプロの演奏家が、有料にもかかわらず、京都・大阪の近郊はもとより、神戸・金沢・東京などから一聴衆として参加して下さり、総勢100人を越す満席の有意義な講座であった。

内容：

1. ご祝儀「八千代獅子」（「万歳獅子」

打合）「八千代」三弦：岡村慎太郎・奥村雅楽智・菊央雄司 「万歳」三弦：片岡リサ・菊信木洋子 箏本手：西川かをり 替手：伊藤志野 胡弓：奥田雅楽之一

2. 稀曲の魅力「狭衣」福田千栄子

3. 比較の楽しみ「吼噓」（異同の大きい三派の聞き比べ）＜京都＞三弦本手：三好晃子 三弦替手：片岡箏：伊藤

＜大阪菊筋＞三弦：菊央 箏：菊信木

＜宮城系＞三弦：奥田 箏：横山佳世子

4. 遊びながらの腕磨き＜糸回し＞「万歳」一の糸：伊藤・片岡・菊信木・福田 二の糸：奥田・奥村・富緒清律・西川 三の糸：岡村・菊央・三好・横山

5. 変幻自在の入れ手「晒」三弦本手：岡村 替手・菊央

6. 作もの「鼠の道行」富緒

7. 打合せ「播鉢」「連木」「切匙」「播鉢」：伊藤・片岡・菊信木・三好・横山 「連木」：岡村・奥田・菊央 「切匙」：奥村・富緒・西川・福田

（久保田敏子）



◆平成19年度第1回公開講座

「今よみがえる平家（平曲）—物語る声と音—」

日時：平成19年9月22日（土）午後2時から午後5時まで

場所：キャンパスプラザ京都（京都市下京区西洞院通塩小路下る）

講演：藤井知昭（民族音楽学、国立民族学博物館名誉教授）、薦田治子（日本音楽史、武蔵野音楽大学教授）

進行役：藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）

受講無料、受講者数約170人、東洋音楽学会西日本支部と共催

内容：

平家物語を琵琶の伴奏でかたる平家（平曲）は、現在となっては希少な音楽遺産である。この遺産は、諸外国の伝統的な語り物、日本中世の音楽史、といった大きな世界につながる、大切な窓口である。この講座では、名古屋に伝承されてきた平家琵琶演奏の記録に力を注いだ研究者、藤井制心氏の、音楽へのまなざしと業績を紹介しながら、平家琵琶の価値、面白さ、そして未来の可能性を考える。なお本講座は、藤井制心氏が所蔵していた平家琵琶の録音が、ご子息の藤井知昭氏によって、本セ



ンターに寄贈されたことを記念し、おこなわれたものである。

当日の次第：

* 薦田治子氏による講演

* 宇治川の物語解説＋井野川孝次演奏の「宇治川」の録音（部分）をきく

* 藤井知昭氏による講演

* 藤井知昭氏＋薦田治子氏＋藤田隆則（司会・進行）によるトーク

* 三検校の連吟による「宇治川」をきく＋土居崎正富演奏の「宇治川」をきく

なお、当日の様子については、センター web ページに詳しく書いているので参照いただきたい。また、パンフレットも作成してあるので、参照いただきたい。（藤田隆則）

◆平成19年度第2回公開講座

「京の芸能 六斎念仏の世界」

日時：2007年11月25日（日）午後2時～4時30分

場所：京都芸術センター フリースペース

実演：京都中堂寺六斎会

お話：橋本治夫氏（京都中堂寺六斎会会長・京都六斎念仏保存団体連合会会長）

司会・進行：田井竜一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）

主催：京都市立芸術大学

共催：京都芸術センター

趣旨：

六斎念仏は、京都を代表する民俗芸能のひとつです。

この講座では、担い手の方々をお招きし、演目・身体動作・伝承の課題等に関する、詳しい説明やデモンストレーションを交えながら、その本質や魅力に迫ります。



講座の後半では、普段なかなか見ることができない、一山打ち（六齋本来の形で全演目を演じること）を、完全な形で披露していただきます。

内容：

1. 日本伝統音楽研究センター所長挨拶
2. 対談形式による解説とデモンストレーション（60分）
—休憩（10分）—
3. 実演：中堂寺六齋念仏〔寄せ太鼓・発願・六段・すがらき・石橋・船弁慶・四つ太鼓・越後獅子・祇園囃子・段々段・山姥・猿廻し・七草・獅子太鼓・獅子舞・攻め太鼓〕（75分）

配布資料：六齋念仏踊りリーフレット、六齋念仏踊り一般公開表、〈越後獅子〉の譜、センター概要2007

報告：

一般参加者に対してのアンケートによると、「あまりよくしらなかった六齋念仏を、詳しい解説付きでみられて良かった」、「子供さんにおしえている様子を間近にみて、六齋念仏の伝承の大変さをした」といった意見が多く、好評であった。

また、演者・参加者の双方から、会場の形式や大きさがちょうど良く、

非常に一体感があって良かったという意見があった。さらに、今後も京都の諸芸能を紹介してほしいという要望が多数寄せられた。

以上のことから、今回の公開講座の趣旨は、参加者によく理解してもらえたとおもわれる。今後も、京都芸術センターと共催で、今回のような担い手に話をじっくりとききながらすすめるレクチャー・デモンストレーションの形式で、京都の民俗芸能を紹介するシリーズを実施していければとねがっている。

批評：榎田盤「伝統芸能レビュー：伝統芸能によってつながる思い 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター公開講座「京の芸能 六齋念仏の世界」、『明倫art 京都芸術センター通信』第92号（2007年12月発行）
（田井竜一）

◆平成19年度第3回公開講座

「松囃子—足利義教が高めた芸能のかたちと意味—」

日時：2008年2月10日（日）

（詳細は次号に掲載します）

◆平成19年度第4回公開講座

「地歌箏曲の楽しみⅡ～箏手付の妙味
で楽しむ洛中洛外絵巻～」

日時：2008年3月9日（日）

（詳細は次号に掲載します）

伝音セミナー

「伝音セミナー」は、平成18年度「大正から昭和初期の日本伝統音楽 SPレコードを聴く（古代、中世、近世の日本伝統音楽）」というテーマで始まった。二年目の平成19年度は「日本の希少音楽資源にふれる—SP盤にきく幻の音」というテーマをたてて、おこなっている。

二年目ですこし軌道にのってきたので、チラシを作成して広報につとめることとした。全体を前期、後期にわけ、二回チラシを作成した。そのために各担当者には、各回のテーマを、早い段階できめてもらうことになった。

このことによって生まれてきた初年度との大きな違いがある。それは、各担当者が、比較的早くから、テーマにそって資料を用意し、物語を用意して、セミナー当日にのぞむようになったこ

とである。したがって、会場はおのずと、本センターの専任教員、非常勤講師らの、それぞれの研究発表の場、互いが切磋琢磨する場であるかのような雰囲気が出てきている。これは、よい傾向ではないかと思う。

また、事務室の協力をえて、市民しんぶん、他、様々なメディアへの広報をおこなった。また、定員設定を従来の30名から50名へと増やした。こうした事務サイドの広報活動が、各回の集客につながっていると思われる。

なお、音源の準備にあたっては、亀村正章氏に、毎回お世話になった。記して感謝申し上げる。

以下、平成19年度の毎回のタイトルを列挙しておくことにしたい。

会場：京都市立芸術大学日本伝統音楽
研究センター合同研究室1

時間：原則として第1木曜日 午後2
時～4時

参加費：無料

定員：先着50名

*第1回 5月10日（木）「平家琵琶を
中心とした中世の語りと歌」ナビゲ
ーター：藤田隆則

*第2回 6月7日（木）「江戸の浄瑠



璃を聞く—古曲保存会レコード その2」ナビゲーター：竹内有一

*第3回 7月5日(木)「『日本民謡レコード』をきく」ナビゲーター：田井竜一

*第4回 9月6日(木)「名演のレコードと体験した生演奏」ナビゲーター：吉川周平

*第5回 10月4日(木)「富崎春昇を聴く」ナビゲーター：久保田敏子

*第6回 11月1日(木)「山田耕柝を聴く」ナビゲーター：横山佳世子

*第7回 12月6日(木)「大正・昭和初期の童謡を聴く」ナビゲーター：奥中康人

*第8回 1月10日(木)「常磐津林中を聴く」ナビゲーター：龍城千与枝

*第9回 2月7日(木)「義太夫節さまざま—男と女・芝居と素浄瑠璃」ナビゲーター：後藤静夫

(藤田隆則)

資料の収集・保存・公開

7月に大阪市立図書館司書の戸倉信昭氏を、資料委員会およびコンピューター情報管理ワーキンググループに招き、文献資料の運用と公開に関わる現状と将来に向けた方策について、総合的な診断とアドバイスを受けた。

資料の閲覧利用サービスについては、大幅な改訂を行った「センター概要」にも利用案内を掲載し、広報につとめた。

外部の閲覧利用者は、内外の研究者のみならず、本学学生等の定期的な利用や、特定のテーマに深い関心をもつ一般市民の利用も増えている。利用状

況や市民の要望を踏まえて、閲覧日の増加や複写サービス等も検討する必要があるだろう。

7階廊下北側側面の展示スペースは、各種の研究資料の展示場所として、約2ヶ月に一度の割合で、新規の展示を発表している。各種のビジュアル性の高い資料を中心に、同じく7階で開催される「伝音セミナー」の内容との関連性を持たせるなど、少ないスペースながら有効活用をはかっている。これまでの経過や今後の予定については、センター web を参照いただきたい。

(竹内有一)

SP レコード音源の web 公開

2007年12月より、センター所蔵 SP レコードの一部の音源が、センター web サイトにおいて無償で試聴できるようになった。学術資料としての提供を目的としたもので、SP レコードに関する著作権・版権に留意した公開を行っている。2008年1月現在で、web で所蔵情報が検索できる SP レコードの枚数は、約1600枚である。そのうち、web で実際に試聴できる SP レコードの枚数は、約550枚、web で閲覧できるラベル画像は約1440枚。SP レコードの検索や絞り込みに便利な導入ページも新たに作成した。

(齊藤尚・竹内有一)

研究成果の公開状況

センターの編集・発行する学術出版物は、毎年着々と累計点数を増やしている。2008年3月末現在で、紀要5点、

研究報告2点、資料集成6点、図録1点、外部出版物1点である。その多くは研究機関や研究者、テーマに関心を持つ市民に対して無償で提供され好評を得ているが、出版内容と読者層の一層の充実と多角化をはかるため、2008年4月以降、一部の出版物については、製作実費程度での頒布を行う予定である。既刊物の詳細はセンターwebをご覧ください、入手方法はセンターにお問い合わせいただきたい。

また、これらの学術出版物を補完し、同等の役割をもつweb媒体として「伝音アーカイブズ」を制作して、各種の資料を公開している。webの利点を生かして随時更新を行っている。詳細はセンターwebサイトをご覧ください。
(竹内有一)

委託研究

2007年度は、非常に専門性の高い実務的な研究業務2件を外部研究者に委託した。

亀村正章氏に「名古屋の平曲オープンリールテープの収録内容の調査研究とデジタル化」を委託。当該資料は、藤井知昭氏より提供された、学術性・希少性の高い第一級の貴重音源である。その成果は、提供資料に関わる基礎的調査と音源のデジタル化による永続的保存を行うものである。音源資料の収集と保存というセンターの研究業務について、その重要性を広く学界や市民に知っていただくとともに、その成果を広く還元するために、本委託研究の成果の一部を、2007年度第1回公開講座で公開した。

大西秀紀氏に「日本伝統音楽研究センター所蔵SPレコードの内容データの作成—発売期の特定を中心に—」を委託。センターの制作する「収蔵資料データベース」のうち、SPレコードに関する書誌的情報の質的向上を目的とする。その成果は、同データベース等の文字情報の更新時に随時反映される。

(竹内有一)

プロジェクト研究・共同研究の報告

平成 19 (2007) 年度

＜プロジェクト研究＞

◆「日本近代における音楽・芸能の再検討」

研究代表者：後藤静夫

共同研究員：今田健太郎（日本学術振興会特別研究員）、上田学（立命館大学大学院）、奥中康人（本学非常勤講師（特別研究員*））、川村清（札幌大学助教授）、澤井万七美（沖縄工業専門学校助教授）、竹内有一、龍城千与枝（本学非常勤講師（特別研究員*））、寺田詩麻（早稲田大学非常勤講師）、寺田真由美（神戸大学大学院）、土居郁雄（国立文楽劇場）、廣井榮子、細田明宏（別府大学専任講師）、真鍋昌賢（大阪大学助手）、横田洋（大阪大学大学院）

3年目を迎え、従来比較的目的の届き難かった対象を取り上げる考察も行われ、これまでの活動で築き上げられた共通認識によって多角的かつ斬新な討論が交わされた。討論を通じては多くの今後の研究の可能性や課題も浮かび上がった。年度の後半は成果のとりまとめに向けての検討も行った。（開催場所は特に断らない限り、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 合同研究室2である）

平成 18 年度補遺

* 第 8 回研究会

2007.02.10（土・日） 発表：上田学

「シネマテックにみる草創期映画興行の一側面」、発表：廣井榮子「豊竹呂昇の再評価の試み—レコードにみる『娘義太夫改良論』の意義と問題点

2007.02.11（日）〈於 大阪大学文学部 B 13 教室〉 プレゼン：細田明宏「浄瑠璃における『クドキの輪』真桑人形における『絵本太功記』の演出」、発表：今田健太郎「『赤垣源藏』を例に、無声映画の伴奏音楽と歌舞伎の陰囃子を比較する」

* 第 9 回研究会

2007.03.10（土） プレゼン：竹内有一「近代の楽器製作における伝統と創作—田邊楽器ワークショップの記録から—」、発表：後藤静夫「文楽の近代の歩み—昭和 5 年の位置付け」

平成 19 年度

* 第 1 回研究会

2007.05.28（土） 発表：土居郁雄「林家延玉一座の番付を巡って—幕末に活躍した落語家の生態」、発表：真鍋昌賢「記録への欲望、『生活』のテキスト化—1920 年代末における『民俗芸術の会』」

* 第 2 回研究会

2007.06.18（土） 発表：細田明宏「語りとしての浄瑠璃／文学研究的な読み」、発表：寺田真由美「民謡酒場とうたごえ運動における民謡」

* 第 3 回研究会

2007.07.21（土） 発表：廣井榮子「フニレコードをとおしてみた『日本』」

* 第 4 回研究会

2007.09.29（土） プレゼン：今田健太郎「新劇の音楽はどこからきたの

（※日本伝統音楽研究センター内呼称）

か? : 和田精の『楽譜』をめぐって」、
発表：川村清志「日本民謡の成立—
国民と郷土のウタの近代」

* 第5回研究会

2007.10.20 (土) プレゼン：上田学
「映画常設館の出現と都市の変容」、
発表：横田洋「連鎖劇の興行とその取締
り—主に東京における事例を巡って—」

* 第6回研究会

2007.11.24 (土) プレゼン：真鍋昌賢
「女流の声—浪花節演者によるジェンダ
ーの再生産」、発表：寺田詩麻「明治
10年前後の新富座—宝樹座の名義のこ
となど—」、発表：古門孝之(ゲストス
ピーカー)「北原人形・挟み遣い人形復
元の経緯と現状」

* 第7回研究会

2007.12.15 (土) プレゼン：土居郁雄
「松本喜三郎の軌跡を見世物興行の中に
追う」、発表：澤井万七美「明治末期か
ら大正前期の琵琶界」

* 第8回研究会

2008.01.14 (月・祝) 発表：石山祥子
(オブザーバー会員)「能楽と黒川能の
近代」

◆歌と語りの言葉と“ふし”の研究—日
本伝統音楽研究の視点と方法

研究代表者：藤田隆則

共同研究員：上野正章(本学非常勤講師
(特別研究員))、内田順子(国立歴史民
俗博物館助教)、遠藤徹(東京学芸大学
准教授)、奥中康人(本学非常勤講師
(特別研究員))、小塩さとみ(宮城教育
大学准教授)、金城厚(沖縄県立芸術大
学教授)、久保田敏子、後藤静夫、薦田
治子(武蔵野音楽大学教授)、近藤静乃、
島添貴美子(富山大学講師)、Silvain

Guignard(大阪学院大学教授)、田井竜
一、竹内有一、細川周平(国際日本文化
研究センター教授)、山田智恵子(くら
しき作陽大学教授)

日本の伝統音楽の諸種目の多くが、
歌詞をもった音楽(いわば声楽)であ
るが、声楽の研究にはあまり焦点が当
てられない。この背後には、学問の制
度上の問題がある。歌詞の研究者(主
に国文学)は、歌詞の内容解釈を優先
させるため、形式の研究は当然後回し
になろう。一方、音楽の研究者(音楽
学)も、音楽を自立したシステムとし
て解釈する営みを中心に置こうとす
ると、言葉のない音楽を中心にせざる
をえない。「音楽」という語が伝統的に器
楽をさしてきたことも背景にある。

言葉に「ふし」が生成するメカニズム
の研究の大切さが学問上で認識されて
いないわけではない。今から30年さかの
ぼる1970年代まで、言葉と歌(speech
and song)の境界をめぐる問いは、一般
音楽学でも主流の問いのひとつだった。
また、日本においても数は少ないもの、
同じ関心にもとづいた、言葉のアクセ
ント・拍節研究が行われてきた。こう
した先達のまなざしや試みにふれつ
つ、一般音楽学の問いに立ち戻ること
には、日本伝統音楽研究の固有の対
象が何かを見定め続けるためにも意
味があるだろう。

* 第1回研究会

日時：2007年5月20日(日)13-17時
場所：京都市立芸術大学日本伝統音
楽研究センター(新研究棟7階合同研
究室)

内容：藤田隆則「言葉と節をめぐ
る諸

問題—そして先行研究」、上野正章「20世紀前半の日本音楽研究について」

* 第2回研究会

日時：2007年7月28日（土）12-16時
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター（新研究棟7階合同研究室）

内容：金城厚「早ブシ・長ブシ、そして歌詞の配分—小泉理論の批判と発展」、島添貴美子「金城氏の著書へのコメント」

* 第3回研究会（二日連続開催）

日時：2007年9月22日（土）14-19時
場所：キャンパスプラザ京都
内容：薦田治子「平家の概説」

日時：2007年9月23日（日）12-16時
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター（新研究棟7階合同研究室）

内容：山田智恵子「義太夫節の言葉とふし、研究方法としての採譜」、奥中康人「山田氏へのコメント」

* 第4回研究会

日時：2007年12月2日（日）12-16時
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター（新研究棟7階合同研究室）

内容：遠藤徹「古代歌謡の構造・記譜・五線譜化をめぐる」

* 第5回研究会

日時：2008年2月9日（土）12-16時
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター（新研究棟7階合同研究室）

内容：藤田隆則「研究会の方向、発信の形式について」

<共同研究>

◆演奏研究—『千重之一重』収載の箏手付楽譜の検証—

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜・伊藤志野・岡村慎太郎・小川（菊央）雄司・奥田智之（雅楽之一）・奥村智子（雅楽智）・片岡リサ・笠原（菊信木）洋子・川村（三好）晃子・國見（西川）かをり・中井猛・野川美穂子・福田千栄子・三上律子（富緒清律）・横山佳世子

地歌の箏手付の楽譜として最古の刊本といえる『千重之一重』（天保3=1832年刊）に収載される58曲の箏譜の内、芸系各派の伝承する現主要曲について比較研究をすることによって、伝承の異同を検証した。

* 第1回：2007.05.27

底本とする国会図書館本と、香川大学版との異同を照合し、掲載曲の中から現行曲を確認。『千重之一重』の記譜法について、大概（凡例）を読み下し、現行譜への読み替え方法を確認。次いで「黒髪」「末の契」「葉の葉」について実際に演奏し検証。

* 第2回：2007.07.22

「水鏡」「浮舟嘶」「四季の眺」「邯鄲」について検証。

* 第3回：2007.09.08

「鳥追」「小簾の外」「袖の露」「貴船」について検証。「鳥追」については「神楽」との打合せも行い、「貴船」については、第五巻収載の替手についても検証した。

* 第4回：2007.12.09

「四つの袖」「宇治巡」「花の旅」「桜尽し」を検証。「桜尽し」については、第五巻収載の替手についても取り上げた。

*第5回：2007.02.17

「西行桜」「嵯峨の春」「越後獅子」を取り上げる予定。なお、最終回は3月9日(日)で、総仕上げとして京都芸術センター講堂に於いて、レクチャーコンサート形式の公開講座を行う予定。

◆ヤタイの祭りと囃子

研究代表者：田井竜一（センター准教授・民族音楽学）

共同研究員：安達啓子（日本女子大学教授・美術史）、入江宣子（仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学）、岩井正浩（神戸大学教授・音楽学）、植木行宣（元京都学園大学教授・日本芸能文化史）、垣東敏博（福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員・民俗学）、後藤静夫（センター教授・芸能史）、土居郁雄（国立文楽劇場・芸能史）、東條寛（四日市市立図書館副館長・民俗学）、永原恵三（お茶の水女子大学教授・音楽学）、西岡陽子（大阪芸術大学教授・民俗学）、樋口昭（創造学園大学教授・日本音楽史）、福原敏男（日本女子大学教授・歴史民俗学）、増田雄（歴史学）、米田実（甲賀市役所市史編纂係・民俗学）

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターで実施された、共同研究「山車囃子の諸相」（2000年度）・「ダシの祭り」と囃子の諸相」（2001 - 2002年度）・「祇園囃子の源流に関する研究」（2004 - 2006年度）を継承する形で、

全国に分布するヤタイの祭りと囃子に焦点をあてて設定されたのが、本共同研究である。「芸屋台」・「囃子屋台」・「ダンジリと太鼓屋台」を大きな柱として、ヤタイの祭りと囃子の諸相について、様々な角度からの考察・議論をおこなっている。

今年度を実施した共同研究会は、以下の通りである（場所は特記しない限り、いずれも京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2ないしは1）。

*第1回研究会

2007年6月9日(土)、テーマ「関東地方のシャギリの諸相」、(1)共同研究会の趣旨と日程の説明、(2)小坂井町菟足神社祭礼の羯鼓稚児舞・獅子舞・隠れ太鼓、長崎くんちのしゃぎりに関する映像記録の上映、(3)飯塚好氏（元埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸員、ゲストスピーカー）「関東地方のシャギリの諸相」、コメンテーター：入江宣子、樋口昭、(4)総合討論

※オプション企画として、6月8日(金)に北野天満宮において、「北野天満宮御祭礼書式（北野天神祭礼絵巻）」を熟覧

*第2回研究会

2006年7月14日(土)、テーマ「天神祭りの囃子」、(1)昭和12年撮影の祇園祭り映像記録、三輪神社祭礼の羯鼓稚児舞・獅子舞に関する映像記録の上映、(2)岩井正浩「瀬戸内海沿岸部におけるだんじりと太鼓台の分布と系譜」、(3)網干毅氏（関西学院大学教授、ゲストスピーカー）「催太鼓への誘い」、(4)総合討論

※オプション企画として、9月14日（金）に名古屋市立博物館において、「津島祭礼図」を熟覧

＊第3回研究会

2007年9月29日（土）、テーマ「堺のダンジリと布団太鼓」、(1) 豊川進雄神社祭礼に関する映像記録の上映、(2) 吉田豊氏（堺市博物館学芸員、ゲストスピーカー）「堺のダンジリと布団太鼓」、(3) 総合討論

※オプション企画として、9月28日（金）に兵庫県立歴史博物館において、「播磨国総社三ツ山祭礼図屏風」を熟覧

＊第4回研究会

2006年10月27日（土）、テーマ「岸和田だんじり祭りの囃子」、(1) 津島天王祭に関する映像記録の上映、(2) 森田玲氏（岸和田だんじり祭り囃子研究家、ゲストスピーカー）「岸和田だんじり祭囃子」、(3) 総合討論

※オプション企画として、10月26日（金）に海の見える杜美術館において、「播磨国総社三ツ山祭礼図屏風」を熟覧

＊第5回研究会

2007年11月10日（土）、テーマ「播磨のダンジリ・太鼓屋台と囃子—魚吹・松原八幡神社祭礼を中心に—」、(1) 牛窓秋祭りに関する映像記録の上映、(2) 西岡陽子「播磨地域の太鼓ヤタイとダンジリ—松原八幡例祭と魚吹八幡例祭を中心として—」、(3) 田井竜一「播磨のダンジリ・太鼓屋台と囃子—魚吹八幡神社祭礼を中心に—」、(4) 宇那木隆司氏（姫路市教育委員会、ゲスト・コメンテーター）「姫路市域の祭礼風流について」、(5) 総合討論

＊第6回研究会

20012月15日（土）、テーマ「四国の

ダンジリ・太鼓台と囃子—香川の事例—」、(1) 福原敏男「『江戸山王祭礼図巻—一個人蔵』の世界」、(2) 田井静明氏（香川県歴史博物館主任専門職員、ゲストスピーカー）「香川の祭礼とダンジリ・太鼓台」、(3) 総合討論

※オプション企画として、2008年1月7日（月）に越前市武生公会堂記念館において、「洛中洛外図屏風」を、1月11日（金）に名古屋市鶴舞中央図書館において、「熱田祭礼図（熱田宮年中行事巻絵）」を熟覧

◆「詞書本とその出版に関する研究」

研究代表者：竹内有一

共同研究員：井口はる菜（滋賀大学非常勤講師）、小野恭靖（大阪教育大学教授）、久保田敏子、後藤藤夫、竹内道敬（元国立音楽大学教授）、龍城千与枝（早稲田大学大学院博士後期課程）、谷垣内和子（東京芸術大学非常勤講師）、配川美加（東京芸術大学非常勤講師）、山崎泉（日本大学非常勤講師）、山根陸宏（天理大学附属天理図書館司書）、吉野雪子（国立音楽大学非常勤講師）、渡邊浩子（大阪音楽大学非常勤講師）

これまでのコンセプトと目的（所報第7号参照）を踏襲し、引き続き、各論的な研究発表を通じて、各分野を横断的に眺めるための考察を重ねた。同時に、研究成果のアウトプットを視野に入れた編集活動を行い、2007年度末に研究報告の出版を目指した。以下、特筆なき場合、司会・進行は研究代表者、会場は日本伝統音楽研究センター合同研究室。

- * 第1回研究会
2007年6月9日(土) 13:00-18:00、(1)
テーマ：詞章本出版の研究をめぐる
2007年度の課題、(2) 近況報告・情報
交換
- * 第2回研究会
2007年7月28日(土) 15:00-19:00、
テーマ：箏曲・地歌の領域における研
究課題の整理と研究報告書作成
- * 第3回研究会
2007年7月29日(日) 13:30-18:00、
(1) テーマ：謡本の基礎研究、研究発
表：重田みち(ゲストスピーカー、新
潟産業大学非常勤講師)「近世を中心と
した詞章本における謡本の位置付け」、
(2) ミーティング：第2回研究会の報
告、今後の課題の整理
- * 第4回研究会
2007年9月23日(日) 11:30-19:00、京
都府立総合資料館・伝音センター合同
研究室、テーマ：研究報告書作成に向
けた史料調査とミーティング、報告書
作成作業
- * 第5回研究会
2007年11月3日(土) 11:30-17:00、テ
ーマ：上方の歌舞伎音楽の研究動向、
研究発表：武内恵美子(ゲストスピー
カー、秋田大学)「『歌舞伎囃子方の楽
師論的研究』のコンセプト」
- * 第6回研究会
2007年11月4日(日) 11:00-15:00、東
山区鳥辺山・伝音センター合同研究室、
テーマ：近世音楽における江戸・上方
の交流(東山界隈の史蹟探訪と研究ミ
ーティング)
- * 第7回研究会
2007年12月9日(日) 14:00-17:00、12
月10日(月) 10:00-17:00、上野学園日

本音楽史研究所(草加市)ほか、テー
マ：研究報告書作成に向けた史料調査
とミーティング、報告書作成作業

非常勤講師(特別研究員[※])の研究報告

平成 19 (2007) 年度

◆上野正章

「明治期から昭和初期の日本の地方都市における音楽文化の研究」

日本における西洋音楽の受容研究は進展が著しい分野である。精緻な資料研究の成果が続々と発表され続けている。また、特に目立つのは地方における西洋音楽受容への関心の高まりである。従来は音楽に興味を持つ郷土史家の出版物が散見される程度であったが、学会発表や学会機関誌で発表者や執筆者が勤務する地域の音楽文化に関する研究を良く見かけられるようになった。しかしながら、主として取り扱われているのは音楽教育であり、比較研究というよりはある地域に限定された研究が多いように見受けられる。

これらを踏まえて継続して行ってきたのが、明治期から昭和初期にかけての日本海地域における西洋音楽の普及についての研究である。この地域と時代を特に取り上げた理由は、研究がそれほど進展していないということもあるが、一つの地域よりも交流があった複数の都市を取り上げて相互関係から音楽文化を考えるとという見通しによる。また、全ての人々への西洋音楽の普及という観点に立って、音楽教育というよりもむしろ芸術音楽に注目して研究を展開してきた。本年度は北陸地域に関してこれまでの研究成果を纏めて報告書を出版し、東洋音楽学会大会で成果発表を行った。

報告書で指摘したのは、まず、1.これらの地域では明治期から恤兵・慈善演奏会が始まり、大正期から師範学校等で演奏会が

しばしば行われ、昭和期に入ると外来音楽家による演奏会が活発に行われるようになるということである。そしてその際、2.演奏会は地方新聞社の主催によるものが多く、その場合、紙上で西洋音楽の情宣が活発に繰り広げられているということである。これらのことから北陸地域では、ラジオの普及以前に西洋音楽の広い普及があったことを示した。さらに、西洋音楽が広まる際に、従来の施設・設備や、地域にすむ人々の風俗・習慣がきわめて重要な役割を果たしていることも指摘した。例えば、大規模な西洋音楽の演奏会は公会堂が建設されるまでは大抵の場合は芝居小屋で行われ、演劇を楽しむ習慣が演奏会の楽しみに接続されたと考えることができる。また、演奏曲目においても、明治期の恤兵・慈善演奏会においては邦楽と洋楽が混在し、藤原義江や関屋敏子の演奏会では西洋歌曲と民謡が織り交ぜられる。

学会発表では、1920年代の島根県で開かれたウェクスラーと藤原義江の独唱会を取り上げた。新聞記事等から当時の演奏会を再構成して普及の実態を明らかにし、同時にその報道の方向性を検討することによって西洋音楽の普及において地方新聞の果たした役割を指摘した。当時の『山陰新聞』では聴衆に演奏会情報を伝えるのみならず、聴衆を育てるといっても良いほど力を入れた報道が展開されている。また、日本の伝統音楽・演劇の資産がどのようにして西洋音楽の普及に用いられていくのかということにも言及した。これらの報告書作成と発表から、地方における西洋音楽の普及に関して類型的なものが指摘できるのではないだろうかと考えている。

その他、日本伝統音楽研究センターの展

(※日本伝統音楽研究センター内呼称)

示コーナーを担当する機会を得たので、吉川英史の初期の仕事を取り上げて展示を行い、書誌を作成し、ホームページ上で簡単な紹介を行った。

◇関連する著作

*2007.11.1 『明治期から昭和前期の福井、石川、富山における西洋芸術音楽の普及について 平成17年～18年度 科学研究費補助金萌芽研究に基く研究成果報告書』

◇関連する口頭発表

*2007.11.18 「1920年代の島根県における西洋芸術音楽の普及について—演奏会の新聞記事の分析から—」、第58回東洋音楽学会大会（2007年）上越市、上越教育大学

◆奥中康人

「近世邦楽の五線譜化に関する歴史的研究」

言うまでもなく、五線譜はヨーロッパで生まれた記譜法であり、日本では明治以降に西洋音楽の流入にともなって広く使われるようになった。そして、西洋音楽をベースとした学校唱歌のような音楽はもちろんだが、日本の伝統音楽に対しても五線譜は用いられた。古来、日本に楽譜が存在しなかったわけではないが、五線譜という情報伝達のメディアの登場による音楽に対する認識、とりわけ音楽の記録や保存、あるいは音楽を研究の対象にするという認識の生成プロセスを歴史的に追跡するために、まずは明治以降、日本の伝統音楽を五線譜に記譜しようとした事例を整理、調査した。

周知のとおり、明治前期の音楽取調掛（東京音楽学校）による箏曲の五線譜化が、この種の最初の事業だが、その影響をうけて、近世邦楽の採譜と五線譜化にとりくんだ東京音楽学校出身の北村季晴（1872-

1931）の活動はとくに注目に値する。北村季晴の末裔にあたる季晴は、東京音楽学校在学中に伊澤修二やディットリッヒ、上原六四郎、山勢松韻らの感化をうけ、和洋の音楽の折衷を目指し、卒業式では、バッハの〈ガボット〉を箏アンサンブルで演奏した。卒業後は在野の立場で、大富豪の鹿嶋清兵衛の援助を受けて大日本音楽倶楽部を組織し、十三代目村屋六左衛門（寒玉）が演奏する〈勧進帳〉〈道成寺〉〈秋の色種〉等を採譜（後年に出版、録音もした）、明治29年には歌舞伎座における九代目市川団十郎の〈道成寺〉で、和洋合奏の伴奏をつとめた。大日本音楽倶楽部では市川染五郎（七代目松本幸四郎）や吉住勝太郎（三代目坂東秀調）、田中源助（十代目田中伝左衛門）らが、ピアノやヴァイオリン、五線譜を学んでいた。従来こうした試みは、文明開化や欧化主義の影響をうけて目新しさを狙った余興か道楽のようなものとみなされてきたが、北村季晴の主張を丁寧に分けると、五線譜による日本伝統音楽の改良と国民音楽の創出を目指すものであった。

北村は、多くの国民にとってなじみのない西洋音楽を直輸入するのではなく、在来の音楽文化を統合することによって「国民音楽」を創出することを目論んでいた。しかし、伝統音楽における口伝による情報伝達は—その情報量や精度は五線譜よりも優れているにもかかわらず—どうしても誤伝・訛伝・消滅が避けられず、さまざまなジャンルや流派の間に存在する壁の原因となっていた。

そこで、近世邦楽を採譜・五線譜化し、五線譜というメディアをとおして音楽レパートリーに公共性をもたせることを北村は期待した。長唄であれ常磐津であれ、ジャ

ンルや流派が異なっても、五線譜によってレパートリーを共有できるようになれば、将来より大きな「日本音楽」が生まれるであろうというのが、かれの構想であった。

ただし、五線譜は万能な記譜法ではない。日本の伝統音楽を尊重する北村はできるだけ正確に長唄の音程やリズムを採譜しようとしたものの、緻密に記譜すればするほど、楽譜が複雑になり実用に適さず、読み易く単純化した楽譜では、その音楽の精妙な部分が抜け落ちてしまうという矛盾に陥った。

結局、北村が対象とした長唄の世界ですら、北村によって採譜された五線譜を用いるにはいたらなかったが、五線譜という紙の上に固定した音符によって、その音楽を記録保存することができるという考え方は、東京音楽学校に設置された邦楽調査掛(明治40年)に継承された。もちろん、通常は緩やかに変化することも内包した口伝による音楽の生きた実態と、紙に固定され変化することのない昆虫標本のような五線譜との矛盾は解消されたわけではない。

五線譜による日本音楽文化の統合という構想は、北村だけの特殊なアイデアではなく、部分的には異なるものの田中正平、田邊尚雄、町田嘉声、本居長世など明治～昭和初期の音楽家、作曲家に広く共有されたものであり、その意味でも、北村季晴の先駆的な活動は再考されるべきであろう。

◆龍城千与枝

「日本伝統音楽における歌舞伎音楽の考察
音声言語的観点からみた音曲の音声表現
—五十音図とモーラの区切りを基準として—」

日本語はモーラ言語であるために、音声の分析にあたっては、拍(モーラ)という

時間的な概念を区切りとすることができる。たとえば、「きって(切手)」を発音するときには、と、「き」「っ」「て」と等時間で発音することによって、意味を伝える。「き」というモーラには[k][i]という二つの音素があるが、「っ」の音素はひとつである。にもかかわらず、どちらも同じ、一モーラととらえられている。音声的に分析する場合は通常、[k]や[t]のように最少の音声単位でも言葉の意味に変化をきたす場合に音韻という術語が使われるが、モーラ言語の場合は、「き」という一モーラに含まれる、子音「k」と母音「i」のふたつの音素が一拍という区切りの中で発音されるときに、一連の音声として認識され、この一連の音声は、意味と連動して理解されてはじめて、音韻として捉えられる場合がある。日本においては、「音韻」という言葉自体が非常に複雑なので、私は、一モーラにおける音声という区切り方で、音声表現を分析するという方法をとりたいと思う。今年度は、このモーラという概念を、オンと表現する音曲についての研究にとりくんだ。

日本音楽の中には、一般的に、音声表現を中心に成立した芸能があるといわれている。そのひとつに、音曲と呼ばれる芸能があると考えられる。なかでも、能や浄瑠璃の伝書では、音曲についてふれられる個所に「五十音図」を掲載していることが多い。「五十音図」は、明治以降、音韻の表とされてきたが、現在日本語の意味の弁別に関わる音韻は、100以上存在するといわれていることから、音韻表とするには不完全であることが指摘されている。また、国語学者の馬淵和夫は音韻表として使用される以前の「五十音図」にも、中国の詩作における音韻という概念を引き継ぐ系統と、悉曇学とよばれる学問と関わりのある系統の二

系統があることを明らかにしている。こうした研究背景を考慮した上で、五十音図が掲載される伝書類をまとめ、比較を行った。その内容は、2007年の5月に企画展示として公開した。伝書に描かれた五十音図をならべてみると、能や浄瑠璃の五十音図は、悉曇学系の音図との共通性があるように感じられた。

五十音図は、サンスクリット語の音韻表をもとに成立したとされるが、編纂者とされる明覚が、音声表として発音方法を書いたものと言及しており、そのさいの子音と母音に当たる個所を発音するための身体の動きを付記しているのが特徴的である。能や浄瑠璃の五十音図にも同様の付記がみられるが、興味深いことに流派によって、その付記がそれぞれに変化していることがわかった。その付記にしたがって、身体を動かすと、流派の特徴をとらえるヒントになるようである。換言すれば、子音と母音を合わせて発音した、一モーラという区切りの中での音声のゆらぎが、それぞれの流派の特徴につながるともいえよう。

そこで、常磐津節の場合に、明治期の名人と呼ばれた常磐津林中が、発音や語り方にこだわったということから、その音声の分析を試みた。浄瑠璃の場合は節まわしがあるために、一モーラの時間はすべてが等間隔にはなるわけではないようだ。しかし、フォルマントとよばれる周波数から、子音と母音の音素をしめす波形を読み取ると、一モーラの区切りを確認することができた。その一モーラの中での音声のゆらぎをピッチ曲線で確認すると、線ではなく、切れ切れの点でつながっていることがわかった。同時に呼吸の強さを分析すると、その量が調節され、ピッチ曲線で空白になった個所を補うかのように呼吸量が増えること

が認められた。現時点では、大まかな枠組みしか捉えられていないが、少なくとも、一モーラ、という区切りは、音声表現によって構築された音曲を観察する上では、なんらかのキーワードになるのではないかと考えられよう。こうしたいくつかのヒントをもとに、今後はより詳細な研究をふかめていきたいと思う。

◇関連する研究発表

- * 2007.5 企画展示「音曲の伝書と五十音図」日本伝統音楽研究センター展示スペース
- * 2008.1.7 伝音セミナー「常磐津林中を聴く」日本伝統音楽研究センター

◆横山佳世子

「地歌箏曲における伝承の異同と問題点・現代邦楽における解釈と演奏法の研究」

昨年度から引き続き、当センターで開催されている共同研究「演奏研究～地歌・箏曲～」で学んだことを活かし、地歌箏曲における伝承の異同と問題点についての研究を行った。本年度の共同研究は、『千重之一重』に収載されている地歌箏曲を取り上げ、異なる版本や書写本、ひいては現行各派の箏手付けや演奏形態などの異同を中心に比較検証する内容であった。

結論として、『千重之一重』と現行の手付けには然程大きな異同はなく、長い年月、かなり正確に伝承されてきた地歌箏曲の歴史と伝承者に毎回敬意を感じる一方、細かい異同も存在し、特に同じ奏法の記譜法でも実際の技法が異なる点については注目すべきであることに気付いた。

さらに、左手奏法による押し手の音程や、後押し、ヒキイロなどの余韻の変化の有無においては、これまでの実演体験を通じて芸系によって異同のあることに漠然と気づ

いてはいたが、現在の各流派・芸系、或いは奏者毎の異同の発端のヒントがそこに潜んでいるように考えられるので、今後の最大の課題として更に掘り下げていきたい。

また、箏手付けとは直接的に関係がないが、歌詞の異同が時折生じる点にも着目し、口承伝承の状況や地域の方言なども含めて更に掘り下げてみたい。

本年度は、上記地歌箏曲の研究と平行して、現代邦楽のジャンルにおいて、特に西洋音楽との接点についても研究を行った。

一つは、例えば広瀬量平氏の作品を演奏する際に、古典の心を如何に引き出して表現するかといったことや、十七弦や二十五弦といった多弦箏と十三弦での表現法など、一定の研究成果を得た。また、三味線での撥遣いや、勘所の手移りの問題などに、今後の演奏に生かせるヒントを得た。

今一つは、地歌箏曲に随時使われる奏法や間の取り方、あるいは、宮城道雄以降に定着した洋楽器から発想を得た奏法などを駆使した現代邦楽の作品を取り上げて演奏した結果、特に、洋楽器や、洋楽的奏法を用いる尺八や横笛などの和楽器と共演する際に生じる問題点や、その改善策について、実際に合奏しながら、効果的な奏法を模索し、ある方向を見いだすことができた。

以上のように、特別研究員としての立場や後ろ盾を背景に、流派を越えた一流の演奏家とも交流でき、実際に洋楽器と共に演奏する機会も増えたことによって、却って、古典の地歌箏曲の味わいや、箏特有の持ち味を如何に表現するかについても理解が深まり、逆に古典の地歌箏曲の魅力をより広い視点で再認識できるようになり、今後の演奏活動に対しても、実りの多い成果を得ることができた。2008年3月には、年間を通じて得た共同研究の成果を公開講座で

発表した。なお、伝音センターにおける研究活動が評価されて、20年度の京都市芸術文化特別奨励者に認定され身の引きしまる思いである。

◇関連する演奏活動

*2007.4.22 「茨木市三曲協会定期演奏会」クリエイトセンターにて『新娘道成寺』他出演。

*2007.5.27 日本伝統音楽研究センター共同研究「演奏研究～地歌・箏曲～」にて『末の契り』実演。

*2007.8.26 「座敷音楽としての地歌―遊びながらの腕磨き―」キャンパスプラザ京都にて『すりばち』『万歳獅子』他実演。

*2007.10.13 「第3回レクチャーコンサート[弾く]」アンサンブルホールムラタにて『みだれ』『幻想曲』他実演。

*2007.10.24 「横山佳世子リサイタル～秋はことに～」クリエイトセンターにて開催（『甦る五つの歌』『枯野砦』『秋の幻想曲』『幻想曲』『焰』演奏）。

*2007.10.29 「第11回石川利光尺八リサイタル～風来疎竹～」ムラマツリサイタルホール新大阪にて『新青柳』出演。

*2007.11.1 日本伝統音楽研究センター伝音セミナー「山田耕筰を聞く」ナビゲーター。

*2007.12.9 日本伝統音楽研究センター共同研究「演奏研究～地歌・箏曲～」にて『宇治めぐり』『桜尽くし』実演。

専任教員の活動報告

平成19(2007)年度

(平成18年度補遺を含む)

吉川 周平

◆著作活動

- * 2007.02.12 「月曜随想 空海、東寺、青龍寺」、『四国新聞』朝刊、p.3
- * 2007.02.24 「安保前夜の歌舞研の先輩」、『早稲田大学歌舞伎研究会六十年誌』、早稲田大学歌舞伎研究会 OB 会、pp.125-126
- * 2007.03.20 「民俗芸能と舞踊学－伝承されている芸能のかたちをとらえ、その意味を考える－」、『演劇研究センター 2006年度 報告書1 早稲田大学 21世紀 COE プログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』、p.44
- * 2007.03 〈所長対談〉「小島美子先生にきく：日本伝統音楽の研究と教育－継承と発展を視点として－」、小島美子との共著、『日本伝統音楽研究』第4号、pp.113-144
- * 2007.03 〈所長対談〉「アンドリュー・ガーストル先生にきく－日本文化に対する西洋からの比較論的アプローチ、悲劇・能・浄瑠璃・歌舞伎芝居絵－」、アンドリュー・ガーストルとの共著、『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所報』第8号、pp.3-17
- * 2007.08.27 「見守り育てて下さった荻原達子さん」、『荻原達子さんを偲んで』、荻原達子さんを偲ぶ会編・発行、p.23
- * 2007.11.21 「四天王寺聖霊会のコスモロジー～西方伝来の至高の宗教と舞楽の融合～」、『第41回雅楽公演会』、天

王寺楽所雅亮会・朝日新聞社、pp.19-21

◆口述活動

- * 2007.03.19 講演「讃岐の雨乞い芸能－念仏踊と綾子踊」、香川県教育委員会・ふるさと学習社会人講師事業、香川県まんのう町役場会議室
- * 2007.03.31 講演「大川念仏踊と香川の雨乞い踊」、大川念仏踊・香川県指定無形文化財指定報告会、香川県まんのう町・琴南農村環境改善センター
- * 2007.06.27 講演「四天王寺聖霊会のコスモロジー～西方伝来の至高の宗教と舞楽の融合～」、第34回雅楽セミナー、天王寺楽所雅亮会・朝日新聞社主催、大阪・北御堂津村ホール
- * 2007.08.05 講演「弘法さんと聖霊会－東寺の市と聖徳太子のお祭り」、司会と解説「雅楽の三管：笙・箏・龍笛による実演－平調音取・平調越殿楽・黄鐘調音取・黄鐘調越殿楽・平調陪臚」、醒ヶ井水まつり、京都市下京区・亀屋良長
- * 2007.12.02 講演「日本のまつりの場に顕現する肉体の変化と舞踊」、第59回舞踊学会大会シンポジウム「からだ・トポスとの対話」(司会：片岡康子、共演者：柳原秀行、村田芳子、太田一枝、木佐貫邦子)、倉敷公民館大ホール

◆プロデュース活動

- * 2007.11.24 演出・舞台監督(山路興造と共同)、「第57回全国民俗芸能大会」、東京、日本青年館

◆放送出演

- * 2007.09.19 ゲスト出演「山崎弘士の人めぐり、音めぐり」(聞き手：山崎弘士)、

KBS 京都ラジオ、2007 年 9 月 19 日（水曜日）、13 時～15 時の生放送 2 時間のうち、14 時～15 時出演

- * 2007.11.21 「大人の芸術論～大人塾流芸術の楽しみ方～」(司会：北村謙、アシスタント：藤井日菜子、出演：潮江宏三、望月重延、呉信一、吉川周平)、『北村謙のハッピー大人塾』、KBS 京都テレビ、2007 年 11 月 21 日（水曜日）21 時 25 分～21 時 55 分

◆企画

- * 2007.09.06 企画・解説、「名演のレコードと体験した生演奏」(アシスタント：亀村正章)、平成 19 年度伝音セミナー「日本の希少音楽資源にふれるーSP 盤レコードにきく幻の音」第 4 回、合同研究室 1

◆調査活動

- * 2007.02.27 香川県木太郡三木町の鰐河神社の大獅子を同町の新開集会所で調査し、同町の天野神社の大獅子を同神社で調査
- * 2007.03.26 香川県東かがわ市の松の下虎頭の舞を調査
- * 2007.04.22 大阪市の四天王寺に行き、聖霊会を調査
- * 2007.07.30 香川県三豊市財田町に行き、さいさい踊りを調査し、弥与苗踊・八千歳踊も調査
- * 2007.08.16 京都市の大文字を見学
- * 2007.09.12 香川県多度津町高見島漁業協同組合で、高見島なもで踊について、聞き取り調査
- * 2007.09.18 香川県三木町の正一・川原井集落集会場に行き、正一・川原井獅子組のぼたん崩しの獅子舞を調査

- * 2007.10.14 香川県三木町南山田に行き、明明宮の山の神祭りに奉納される南山田の獅子舞を調査

◆学内活動

- * 評議員、将来構想委員会、自己点検・評価委員会、全学広報委員会、国際交流委員会、安全衛生委員会、日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会

◆対外活動

- * 文化庁文化審議会文化財分科会第 5 専門調査会（民俗文化財）部会長・無形民俗文化財委員会委員長
- * 文化庁平成 19 年度（第 62 回）芸術祭執行委員・芸術祭審査員（音楽部門・関西）
- * 文化庁平成 18・19 年度芸術選奨推薦委員（音楽部門）
- * 文部科学省独立行政法人・文化分科会・国立文化財機構部会評価委員会委員
- * 大阪府文化財保護審議会委員
- * 香川県文化財保護審議会委員
- * 大阪市文化財保護審議会委員
- * 香川県平成 19 年度ふるさと文化再興事業・伝統文化総合支援研究委員会委員
- * 香川県立歴史民俗資料館運営協議会会長（2007 年 3 月まで）
- * 立命館大学大学院文学研究科非常勤講師（2007 年 4 月～2007 年 9 月、「日本文学・芸術論 I」担当）
- * 舞踊学会理事
- * 民俗芸能学会理事
- * その他の所属学会：民族芸術学会、日本民俗音楽学会、日本口承文芸学会、楽劇学会、日本歌謡学会、日本演劇学

会、東洋音楽学会、日本スポーツ人類学会、芸能史研究会、芸能学会、歌舞伎学会、中世文学会

久保田 敏子

◆著作活動

◇解説・楽曲論

- * 2007.03.24 『箏曲組歌演奏会～流派を越えて組歌の魅力を探る～』、「箏組歌について」、「天下太平」「式の友」「明石」「雲井曲」「心尽し」「玉鬘」「若葉」、紀尾井小ホール
- * 2007.05.26 『琴友会・古典を勉強する会 箏曲地歌演奏会』、「楓の花」「夕顔」「秋風辞」「菊の朝」「御山獅子」、守口文化センター
- * 2007.06.15 山口巖作曲『御代万歳』山口琴榮監修・作譜、大日本家庭音楽会刊
- * 2007.06.17 『菊継千晃 箏コンサート』、水野利彦「さくら21」「海のアラベスク」、沢井忠夫「黒田節による幻想曲」、宮城道雄「春の海」「手事」、川西市みつなかホール
- * 2007.06.23 大阪新音催し『宮城道雄を偲ぶ箏の夕べ～ぬくもりを求めて』、「吾妻獅子」「尾上の松」、杵屋正邦「暖流」、宮城道雄「昭和松竹梅」「春の賦」、いずみホール
- * 2007.06.27 『東音中島勝祐 りさいたる』・『一門会』、創作上方浄り「城山狸」「天の網島」「隠れ笠鬼女面影」、長唄「船弁慶」「傀儡師」「吉原雀」「石橋」、創作「松竹梅」、箏曲「江の島曲」一中節「松風」、国立劇場
- * 2007.09.09 『菊原初子十三回忌追善・琴友会百回記念 箏曲地歌演奏会』、箏

組歌「薄雪」、菊原琴治「秋風辞」銀世界」、古典「けしの花」「神楽初」「里の暁」「翁」「磯千鳥」「四季の眺」「若葉」「松竹梅」「新青柳」「御山獅子」「五段砧」「残月」「萩の露」、「融」「虫の音」、山田流「岡康砧」「松風」、宮城道雄「菊の栄」、国立文楽劇場

- * 2007.10.12 『菊史雄司三弦リサイタル～地歌の妙技～』、「さらし」「菊の露」「千代の鶯」、ワッハ上方ワッハホール
 - * 2007.10.12・13 邦楽名曲鑑賞会『女流のいま』、宮蘭「道行菜種の乱咲」、山田流箏曲「六玉川」、新内「明烏夢泡雪一浦里雪責」、長唄「英執着獅子」「吾妻八景」、地歌「松竹梅」、河東「邯鄲」、義太夫「壇浦兜軍記一阿古屋琴責の段一」、国立劇場主催
 - * 2007.10.13 舞踊公演『東西名流舞踊鑑賞会』、地歌「夕顔」「山姥」「花の旅」「綱」「小簾の戸」、清元「尊飛脚新口往来」、常磐津「景清」、長唄「二人狸々」「賤機帯」、荻江「八鳥」、国立文楽劇場
 - * 2007.10.13 『一弦歌の世界一馬場尋子 箏・三絃リサイタル』、「枯野砧」「ゆれる秋」「琴相聞」「国偲歌」、イシハラホール
 - * 2007.10.26 『林沙奈邦楽リサイタル』、「リサイタルに寄せて」、三味線組歌「弄齋」、段物「乱輪舌」、宮城道雄「五十鈴川・祭の太鼓」、自作「Fusion＜融合＞」、吉崎克彦「スペイン風即興曲」、国立文楽劇場小ホール
- ◇ CD アルバム解説
- * 2007.07.25 『鳥居名美野 箏組歌第二集』、「天下太平」「薄雪」「薄衣」「友千鳥」「四季の富士」「四季の富士跋入」「玉鬘」「四季曲」「思川」ピク」「ターエンタテインメント、VZCG - 86385 ~ 6

- * 2007.08.22 『菊原光治地歌箏曲の世界』
「七つ子」「下総」「古流四季源氏」「九段・雲井九段」「四段砧」「朝戸出」「芦刈」「綾衣」「浮舟」「口切」「翁」「残月」「縁の綱」「ゆき」「金五郎」「十三鐘」「鳥辺山」「名護屋帯」「放下僧」「石橋」「新高砂」「名所土産」「たぬき」、コロムビア、COCJ-34457-61
- * 2007.11.01 『ハギオン プネウマ～聖なる息吹～外山香』権代敦彦「Hagion Pneuma」、吉松隆「もゆらの五つ」、牧野由多可「風」、入野義郎「尺八と箏の協奏的二重奏」、沢井忠夫「鳥のように」、HOUGAKUNOTOMO R-700425
- * 2007.12.06 『四世清元梅吉至芸の世界』、清元「隅田川」「峠」「の万歳」「お夏狂乱」「折紙」「瓢箪」、東明「梅」「春の鳥」、ビクターエンタテインメント VZCP-1116～7
- * 2007.12.27 邦楽技能者オーディション合格者『琴古流尺八 芦垣嶺盟』、「五段砧」「鹿の遠音」「尾上の松」「園の秋」、日本伝統文化振興財団 VZCF-1009

◇連載

- * 200701.1～11.1 隔月、「根曳の松」「西行桜」「今小町」「儘の川」「園の秋」「冬の曲」、創明音楽会機関誌『創明』
- * 2007.02.01～12.01 隔月、「梅の宿」「四季の眺」「楓の花」「小簾の外」「秋風の辞」「五段砧」、『楽報』、都山流尺八楽会機関誌
- * 2007.04.20・09.15 「地歌箏曲の先師～箏曲の流派～」⑦・⑧、『三曲』、日本三曲協会機関誌
- * 2007.05.20 「長谷検校と九州系地歌⑥」、『長谷検校記念全国邦楽コンクール本選』プログラム、熊本市産業文化会館大ホール

◆監修・企画等

- * 2007.01.13 東洋音楽学会主催、科学研究費助成公開シンポジウム「伝統文化の継承と発展—音楽教育の現場から—声からはじめる日本音楽の指導～」実行委員長、イイノホール
- * 2007.02.10 京都芸術センター主催「継ぐこと伝えること～馬場尋子」
- * 2007.03.11 レクチャーコンサート第二回「打つ」、京都コンサートホール アンサンブルムラタ
- * 2007.03.17 平成18年度第3回公開講座（詳細は本誌p.27に記載）
- * 2007.03.18 「大和の念仏」、『奈良の音シリーズ』、秋篠音楽堂
- * 2007.04.23～25 菊原光治 CD アルバム監修立会
- * 2007.10.13 レクチャーコンサート第三回「弾（はじ）く」京都コンサートホール アンサンブルムラタ

◆口述活動

◇講演

- * 2007.07.29 「管絃～貴族の必修教養でもあった音楽遊び～」、『プラザカレッジ京都学講座～みやこの遊び～』、大学コンソーシアム京都
- * 2007.08.26 「座敷音楽としての地歌～遊びながらの腕磨き～」、同上

◇解説・司会・論評等

- * 2007.04.21 『当道友楽会』「越後獅子」「新高砂」「里の暁」「楓の花」「若菜」「新娘道成寺」「春の曲」「松の寿」「宇治めぐり」「初鶯」「夕顔」「茶音頭」「桂男」、森岡章「つむぎ唄」、野村正峰「舞扇」、メルパルク大阪
- * 2007.05.01 NHK 「名人の至芸～竹本津大夫～」、『芸能花舞台』収録（05.26

放映、他に再放送)

- * 2007.05.26 『箏曲地歌演奏会』、「玉椿・袖の雨」「明治松竹梅」「面影」「八島朝」「御山獅子」「夜々の星」「若菜」「残月」「夕霧文章」、エナジーホール
- * 2007.06.23 「宮城道雄の人物像とその作品」、『宮城道雄を偲ぶ箏の夕べ』、いずみホール
- * 2007.06.28 『太田道嶺 箏・三弦・十七弦リサイタル』、山本邦山「上無」、杵屋正邦「明鏡」、長沢勝俊「六連星。菊重精峰「潮流」、豊中市立アクア文化ホール
- * 2007.08.26 「狐の嫁入」「蛙」「荒鼠」「狸」「小猿」「古道成寺」、菊重精峰「雪のように」、『韻』そごうホール
- * 2007.09.01 『地歌箏曲演奏会・祥門会』。国立文楽劇場、菊武祥庭「鶯の曲」、野村正峰「篝火」「胡茄の歌」、山勢松韻「都の春」、古曲「松竹梅」「儘の川」「園の秋」「御山獅子」「新浮舟」「七小町」「八重衣」「六段の調」、国立文楽劇場
- * 2007.09.02 「柳川三味線を探る～二題～」、十二月新組「新雪(御幸)」、沢井忠夫「枯野砧」、『林美恵子 地歌・箏曲演奏会』、府民ホールアルティ
- * 2007.10.04 「富崎春昇を聴く」、伝音セミナー『日本の希少音源にふれるーSP盤にきく幻の音』、日本伝統音楽研究センター
- * 2007.12.08 「三味線組歌演奏会」、「飛驒組」「錦木」「琉球」「紅」「茶碗」「松にござれ」「弄齋」「葛の葉」、京都染織会館シルクホール

◆所属学会

- * (社) 東洋音楽学会、日本音楽学会、

楽劇学会、日本歌謡学会(評議員)、日本民俗音楽学会

◆学内活動

- * 付属図書館運営委員、自己点検・評価委員、ハラスメント防止対策委員

◆社会活動

- * 文化審議会文化財分科会第四部門専門委員、京都府古典芸能振興公演補助金審査委員、京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)分科会委員、京都コンサートホール企画運営委員、京都の秋音楽祭実行委員、京都市芸術文化特別奨励制度選考委員、京都市芸術新人賞・功労賞選考委員、京都芸術センター運営委員、大阪府伝統文化教育推進協議会委員、大阪21世紀協会企画運営委員、奈良秋篠音楽堂伝統芸能企画運営委員、ポララ伝統文化振興財団ポララ賞選考委員、日本伝統文化振興財団邦楽技能社オーディション選考委員、NPO法人「日本の音振興普及協会」副理事長、NPO法人「奈良芸能文化協会」理事、文化日本尺八連盟オーディション審査員、熊本長谷記念邦楽コンクール審査員、

後藤 静夫

◆著作活動

- * 2007.03.30 報告「黄檗の声明(梵唄)」(京都国際会議2006 レポート)『日本伝統音楽研究センター所報』8、pp.22-23
- * 2007.12.19 翻刻並びに後書「難波鉦一松の部抄」『京都大学人文科学研究所

共同研究（文明と言語班）研究報告書
拾遺』

◆プロデュース活動

- * 2007.07.27～28 企画・講義・司会
京都造形芸術大学通信教育部 総合教
育科目「伝統演劇・文楽」三業の実演
と解説・講義 前期 国立文楽劇場他
- * 2007.11.16～17 同上 後期

◆講演・口述活動

- * 2007.01.18 講演「世界遺産としての文
楽」、大手前ライオンズクラブ文化講演
会、キャッスルホテル
- * 2007.04.27 講演「義太夫作品と犯罪」、
名古屋更正保護女性会、ルプラオーザン
- * 2007.09.08 解説出演「仮名手本忠臣
蔵・早野勘平腹切の段」（『芸能花舞台』、
NHK-TV）

◆講義・講座活動

- * 2007.07.03～05 人形劇パペットアー
ク特別講座 講師「伝統人形劇で人形
を遣うとは？」、東かがわ市とらまる人
形劇研究所
- * 2007.08.09～10 放送大学面接授業
講師「文楽—協同が生み出す至高の芸」、
放送大学大阪学習センター
- * 2007.10.20 講義「文化・文政の風俗、
町並み—熙代勝覧に即して」、文楽応援
団研修会
- * 2007.11.01 講師「おもしろ文楽解説講
座」① サンケイリビングカルチャー
講座
- * 2007.11.15 同上②
- * 2007.12.06 同上③

◆調査・取材活動

- * 2007.01.19 藤田美術館 洛中洛外図屏
風 調査
- * 2007.01.26 金沢市立中村記念美術館
祇園祭礼図屏風 調査
- * 2007.05.28 島根県立美術館 洛中洛外
図屏風 調査
- * 2007.03.02 姫路市立城郭研究室 伊和
明神臨時祭礼図 調査
- * 2007.03.16 岐阜市歴史博物館 洛中洛
外図 調査
- * 2007.03.28 竹本伊達大夫氏 聞き取り調
査
- * 2007.04.22 四天王寺聖霊会 調査
- * 2007.05.09 住吉大社 卯の葉神事調査
並びに日中交流 1400 年記念国際シンポ
ジウム討論参加
- * 2007.05.11 修学院離宮 杉戸画 調査
- * 2007.05.23 青蓮院 杉戸画 調査
- * 2007.06.08 北野天満宮 北野天神祭礼
絵巻 調査
- * 2007.09.14 名古屋市博物館 津島祭礼
図屏風 調査
- * 2007.09.28 兵庫県立歴史博物館 三ッ
山祭礼図 調査
- * 2007.10.26 海の見える杜美術館 三ッ
山祭礼図屏風 調査
- * 2007.11.03 復活朝鮮通信使行列 調査
（御池～河原町）
- * 2007.11.12 望月秀左久・太明吉氏（文
楽囃子方）聞き取り調査（東文研と）
- * 2007.12.19 大阪青山歴史文学博物館
祇園祭礼図 調査
- * 2007.12.25 吉田簀助師（文楽人形遣い）
聞き取り調査（東文研と）
- * 2008.01.07 武生公会堂記念博物館 洛
中洛外図屏風 調査
- * 2008.01.11 鶴舞中央図書館 熱田祭礼
図 調査

◆学内活動

- * 評議員
- * 芸術教育振興協会評議員

◆対外活動

- * 日本万国博覧会記念機構 基金のあり方検討会委員 (委員長代理)
- * 京都大学地球環境学堂三才学林 運営懇話会委員
- * 大阪府立東住吉高校 学校協議会委員 他

田井 竜一

◆著作活動

- * 2007.10.23 論文「桂地蔵前六斎念仏—その伝承をめぐって—」、伝音アーカイブズ、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・ホームページ、<http://jupiter.kcu.ac.jp/jtm/archives/resarc/rokusai/index.html>、(インターネット改訂版)
- * 2007.02.22 調査報告「京都祇園祭り北観音山の囃子」、祇園囃子アーカイブズ、伝音アーカイブズ、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・ホームページ、<http://jupiter.kcu.ac.jp/jtm/database/gionbayashi/kitakannyama/index.htm>、(増田雄との共同執筆、インターネット改訂版)
- * 2007.02.28 調査報告、京都府教育委員会報告書編集、三隅治雄・大島曉雄・吉田純子編『近畿地方の民俗芸能 2 京都』、日本の民俗芸能文化調査報告書集成 13、東京、海路書院、2007年2月28日(「祇園祭の囃子：長刀鉦」、「祇園祭の囃子：函谷鉦」、「祇園祭の囃子：月鉦」(以上、増田雄との共同執筆)

筆)、「園部の丹波祭囃子」、「口八田の屋台囃子」、「質美の屋台囃子」(以上、分担執筆)、「長刀鉦の囃子」、「函谷鉦の囃子」、「月鉦の囃子」(以上、増田雄との共同執筆)、pp.97-99、99-100、101-103、108-113、114-119、120-129、273-282、283-294、294-306

- * 2007.03.30 調査報告「京都祇園祭り南観音山の囃子」、『日本伝統音楽研究』第4号、pp.79-112
- * 2007.08.09 調査報告「京都祇園祭り南観音山の囃子」、祇園囃子アーカイブズ、伝音アーカイブズ、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・ホームページ、<http://jupiter.kcu.ac.jp/jtm/database/gionbayashi/minamikannyama/index.html>、(インターネット改訂版)
- * 2007.02.01 書評論文：「井上貴子著『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』、東京、青弓社、2006年」、『ポピュラー音楽研究』Vol.10、pp.171-175
- * 2007 解説「世界の諸民族の音楽」、畑中良輔他『高校生の音楽 1 研究資料編』、東京、教育芸術社、pp.64-67
- * 2007.03.31 研究発表要旨および討論参加記録、高松晃子編『伝統から創造へ日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 平成十八年度研究報告』、東京、日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業、「伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション—」、「芸術文化における〈伝統的なもの〉」グループ

◆口述活動

- * 2007.11.10 研究発表「播磨のダンジリ・太鼓屋台と囃子—魚吹八幡神社祭礼を中心に—」、京都市立芸術大学日本

伝統音楽研究センター 共同研究「ヤタイの祭りと囃子」、2007年度第5回研究会、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 合同研究室 1

- * 2007.01.21 講演「外からみた『水口囃子』」、大水口宿禰ット第4回勉強会、水口社会福祉センター福祉ホール
- * 2007.01.28 講演「奈良と京都の六斎念仏」、探求サロン 8～もっと知りたい人のために～、秋篠音楽堂運営協議会主催、秋篠音楽堂伝統芸能部企画・制作、秋篠音楽堂6階ロビー
- * 2007.02.24 講演「石取祭の囃子と歌」、国重要無形民俗文化財指定答申記念石取祭調査報告会、桑名市教育委員会主催、くわなメディアライブ1階 多目的ホール
- * 2007.03.18 講演「奈良における民俗と六斎念仏」、秋篠音楽堂 第4回伝統芸能公演、秋篠音楽堂
- * 2007.06.16 講演「南観音山の囃子について」、南観音山一般公開研修会、2007年6月16日(土)、京都芸術センター 大広間
- * 2007.07.13 講演「祇園囃子、楽器と囃子の聴きどころ」、池坊短期大学公開講座「日本の伝統音楽」第3回、2007年7月13日(金)、池坊短期大学洗心館地階こころホール
- * 2007.07.05 解説「『日本民謡レコード』をきく」、平成19年度上半期 伝音セミナー「日本の希少音楽資源にふれる—SP盤にきく幻の音」第3回、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 合同研究室 1

◆企画

- * 2007.11.25 企画・司会・進行「京の芸

能 六斎念仏の世界」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成19年度第2回公開講座、2007年11月25日(日)、午後2時～4時30分、京都芸術センター フリースペース、京都市立芸術大学主催、京都芸術センター共催

◆調査・取材活動

- * 継続中 京都祇園祭り囃子調査、坂越の船祭り調査、波々伯部神社祭礼、福住の川原住吉神社祭礼調査
- * 祭礼図の熟覧：2007年6月8日(金)に北野天満宮において「北野天満宮御祭礼書式(北野天神祭礼絵巻)」、9月14日(金)に名古屋市立博物館において「津島祭礼図」、9月28日(金)に兵庫県立歴史博物館において「播磨国総社三ツ山祭礼図屏風」、10月26日(金)に海の見える杜美術館において「播磨国総社三ツ山祭礼図屏風」、2008年1月7日(月)に越前市武生公会堂記念館において「洛中洛外図屏風」、1月11日(金)に名古屋市鶴舞中央図書館において「熱田祭礼図(熱田神宮年中行事絵巻)」

◆学内活動

- * 将来構想推進委員会委員、将来構想推進委員会教育・研究部会委員

◆対外活動

- * 国立民族学博物館共同研究員
- * 人間文化研究機構連携研究員
- * 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究共同研究員
- * 科学研究費補助金(基礎研究(B))「中国新疆ウイグル族において継承し展開する合奏音楽“ムカム”の音楽様式研究」(研究代表者：樋口昭) 研究分担者

- * 兵庫県文化財保護審議会委員
- * 桑名石取祭の祭車行事保存伝承委員会委員 (桑名市教育委員会)
- * 独立行政法人日本芸術文化振興会文楽劇場短期公演等専門委員会委員
- * 伝統文化総合支援研究委員会委員 (兵庫県)
- * 坂越の船祭り総合調査団調査員 (赤穂市教育委員会)
- * 所属学会：(社) 東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会、日本民族学会、民族芸術学会

竹内 有一

◆著作活動

◇冊子媒体

- * 2008.3.31 研究ノート「古曲保存会のレコード制作—大正中期の町田嘉章による近世邦楽研究—」『日本伝統音楽研究』第5号、pp.81-100
- * 2008.3.25 小論「ぶたい：幕内からみる関西の江戸音曲」『楽劇学』第15号、pp.97-99
- * 2007.08.31 書評「武内恵美子著『歌舞伎囃子方の楽師論的研究』」、『東洋音楽研究』第72号、pp.145-148
- * 2007.04.29 発表要旨(東洋音楽学会西日本支部定例研究会 第232回例会での研究発表「浄瑠璃本の出版システムをめぐって：豊後系浄瑠璃本の事例報告」)、『(社) 東洋音楽学会西日本支部支部だより』第58号、pp.2-3
- * 2008.3.10 評論「変わらない空間」『上方芸能』第167号、p.35
- * 2007.11.01 解説「秘曲・新曲サロン 32

常磐津 永寿松竹梅」『日本舞踊』第59巻11月号、pp.26-28

- * 2008.02.09 解説「長唄 二人椀久」、日本の響き「和の音を紡ぐ」第2回、いずみホール
- * 2007.03 報告「展観・ワークショップ 日本伝統音楽研究センター所蔵田邊コレクションの楽器」『京都国際会議2006 芸術がデザインする平和のかたち』、京都市立芸術大学京都国際会議2006開催委員会、pp.47-50
- * 2007.03 英文報告「Exhibition and Workshop "The Research Centre for Traditional Japanese Music's TANABE Instrument Collection"」『京都国際会議2006 芸術がデザインする平和のかたち』、京都市立芸術大学京都国際会議2006開催委員会、pp.51-53

◇web媒体

- * 2007.08 ~ 資料「箏曲・地歌の歌本—伝音センター関係所蔵一覧—」『伝音アーカイブズ』、日本伝統音楽研究センター web
- * 随時 研究情報ブログ『でんおん 805』
<http://denon805.exblog.jp/>

◆口述活動

◇口頭発表

- * 2007.08.05 「上方の『長唄けいこ本』をめぐって—上方における江戸音曲の定着と生産—」、岫半分芝居半分の会、高槻市立文化会館集会所
- * 2007.06.07 「江戸の浄瑠璃を聴く」、2007年度第2回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター

◇プロデュース

- * 2007.04-2008.03 共同研究「詞章本とその出版に関する研究」(全7回)、日

本伝統音楽研究センター（別掲）

- * 2007.04-2008.03 勉強会「正本を読む会」（全13回）、日本伝統音楽研究センター

◇教育・講義・講演等

- * 2007.10～2008.01 「日本音楽史Ⅱ」（全15回）、京都市立芸術大学音楽学部
- * 2007.10.29、11.19 「淡路人形浄瑠璃教養講座」、文化庁 文化芸術による創造のまち支援事業、南あわじ市三原公民館

◆調査・取材活動

- * 随時 詞章本出版物（浄瑠璃本・うた本）等の書誌調査およびデータ作成
- * 随時 和本の市場調査およびその収集・保存・公開に関わる調査（古書店、古書市、ネットオークション等）
- * 随時 歌舞伎・文楽・邦楽・日本舞踊等の公演・稽古における演奏手法や伝承実態等の調査
- * 随時 演奏者に関わる史蹟・墓碑、およびその記録・文書類の基礎調査

◆演奏活動

- * 2007.05.12 第23回舞踊・邦楽公演「新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会」、常磐津「屋敷娘」の浄瑠璃演奏、国立文楽劇場
- * 2007.07 七月大歌舞伎、常磐津「身替座禪」の浄瑠璃演奏、大阪松竹座
- * 2007.07.04 NHK-FM「邦楽のひとつとき」、常磐津「寿松の名所」「駕屋」の浄瑠璃演奏

◆学内活動

- * 自己点検・評価委員会委員、同大学評価部会委員、同作業部会委員
- * 広報委員会委員、同電子メディア検討部

会委員、同印刷メディア検討部会委員

- * 情報管理委員会委員、同ネットワーク管理運営部会委員、同情報スペース運営部会委員

- * 大学創立130周年記念事業準備委員会委員

- * 2007.03 編集協力『京都国際会議2006 芸術がデザインする平和のかたち』、京都市立芸術大学京都国際会議2006開催委員会、135pp・DVD1枚（2006年度補遺）

◆対外活動

- * 国際日本文化研究センター共同研究「民謡研究の新しい方向」共同研究員
- * 東洋音楽学会 西日本支部委員
- * 楽劇学会 編集委員
- * 近世文学会、藝能史研究会、歌舞伎学会、国際浮世絵学会、洋学史研究会、長野郷土史研究会 各会員
- * 洋楽流入史研究会 事務担当
- * 正本を読む会、近世邦楽研究会 幹事
- * 咄半分芝居半分の会 同人
- * 常磐津協会 正会員
- * 大学コンソーシアム京都セカンドアカデミー講師

藤田 隆則

◆著作活動

- * 2007.9.22 編集および「開催の趣旨」執筆『今よみがえる平家（平曲）—物語る声と音—』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成19年度第1回公開講座、当日配布パンフレット、2007年9月22日、全20p
- * 2007.11.30 単著エッセイ「世阿弥時代

の「地謡」『世阿弥時代の地謡による融をみる（公演パンフレット）』2007（平成19）年11月30日、福王会、1p

- * 2007.12.15 単著論文「歌舞が儀式的なものとなる機構—西浦田楽にみられる「離脱」と「放置」菅原和孝（編）『身体資源の共有 資源人類学9』弘文堂、pp.157-188
- * 2007.12.20 単著小論文「旋律型」、徳丸吉彦・高橋悠治・北中正和・渡辺裕（共編）『事典 世界音楽の本』岩波書店、2007（平成19）年12月、pp.143-146
- * 2007.12.20 単著小論文「記譜法」、徳丸吉彦・高橋悠治・北中正和・渡辺裕（共編）『事典 世界音楽の本』岩波書店、2007（平成19）年12月、pp.150-155
- * 2007.12.25 単著口頭発表報告「フシの数理的骨格としての韻律法-国語科から逸脱する領域」〔（プロジェクト研究1）日本音楽をどのように捉えたらいいのか（その2）—言葉と音楽・音楽科と国語科—のうち担当部分、『音楽教育学』第37巻第2号、pp.39-41
- * 2007.12.26 単著レポート「学会例会レポート：北米における「民族音楽学の現在：制度、実態、イデオロギー（第236回定例研究会、2007年12月9日、国立民族学博物館）」『東洋音楽学会西日本支部 支部だより』第60号、2007年12月、pp.2-6

◆口述活動

- * 2007.05.10 音源内容解説「平家琵琶を中心とした中世の語りと歌」（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター伝音セミナー、第1回、京都市：京都市

立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1

- * 2006.05.20 研究発表「言葉と節をめぐる諸問題そして先行研究」日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「歌と語りの言葉と「ふし」の研究—日本伝統音楽研究の視点と方法」平成19年度第1回研究会、京都市：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2
- * 2007.9.22 総司会と討論「今よみがえる平家（平曲）—物語る声と音—」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成19年度第1回公開講座、京都市：キャンパスプラザ京都
- * 2007.11.10 パネルにおける研究発表「日本音楽をどのように捉えたらいいのか（その2）—言葉と音楽・音楽科と国語科—」（伊野義博、澤田篤子、加藤富美子との共同パネル）、日本音楽教育学会第38回大会、岐阜市：岐阜大学教育学部
- * 2007.11.18 研究発表「能の地謡をめぐる演出史」、東洋音楽学会第58回大会（2007年11月17日～18日）、上越市：上越教育大学
- * 2007.11.30 対談「福王会：世阿弥時代の地謡による「融」をみる」（対談：天野文雄×藤田隆則）、大阪市：大槻能楽堂

◆プロデュース活動

- * 2006.9.22 企画・実施・資料作成「今よみがえる平家（平曲）—物語る声と音—」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成19年度第1回公開講座（東洋音楽学会西日本支部共催）、京都市：キャンパスプラザ京都
- * 2007.11.30 企画・実施・資料作成補助

「公演：世阿弥時代の地謡による「融」をみる」、福王会主催、大阪市：大槻能楽堂

◆調査・取材活動

- *新規 福岡県みやま市瀬高町大江の幸若舞にみられる口頭構成法の調査
- *継続中 謡曲・能の囃子の伝承にかかわる調査

◆学内活動

- *附属図書館・芸術資料館運営委員会委員
- *京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師
(2007.04-2007.09)

◆対外活動

- *日本音楽学会機関誌編集委員
- *神戸女学院大学音楽学部非常勤講師
(2007.09-2008.03)
- *所属学会 日本音楽学会、楽劇学会、
(社) 東洋音楽学会、能楽学会、
International Council for Traditional Music,
Society for Ethnomusicology

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2007

設立の理念

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指し、2000年に設立されました。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に受け継いできている日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を研究し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

主な活動内容

- ◆資料の収集・整理・保存
- * 文献資料（図書、逐次刊行物、古文獻、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む）
- * 音響映像資料
- * 楽器資料
- * 絵画資料
- * データベースなどの電子資料
- ◆日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究
- * 専任教員による個人研究
- * 非常勤講師（特別研究員）による特定のテーマの研究
- * 外部の研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究（「委託研究」）
- ◆日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究
- * 国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究活動（「プロジェクト研究」「共同研究」）
- * センターが外部と共同して行う調査研究
- ◆活動成果の社会への提供

- * 市民向け公開講座・セミナー等の開催
- * 紀要・所報・資料集成などの学術出版物の発行
- * 電子メディアによる情報発信

研究の視点と領域

- ◆伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる
- * 明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
 - <古代> 祭祀歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）
 - <上代・中古> 仏教音楽（声明等） 宮廷の儀礼・宴遊音楽（雅楽等）
 - <中世> 仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等） 武家社会の芸能（能・狂言等） 流行歌謡（今様、中世小歌等）
 - <近世> 外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽） 劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等） 非劇場音楽（地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等） 流行歌謡（小唄、端唄等）
- ◆近代社会での伝統音楽の展開をみすえる
- * 伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究
- * 伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究
- ◆広い視野で生活の音楽をみすえる
- * 民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究
- * 生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭祀音楽等の民俗芸能）の研究

スタッフ

- ◆専任教員
- 所長：吉川周平（日本民俗音楽・比較舞踊学）
「日本芸能における神とほとけの表現の研究」「民俗芸能における身体動作のかたちとその意味の研究」
- 教授：久保田敏子（日本音楽史学）
「邦楽の歴史的音源に関する研究」
「地歌・箏曲の作品研究」
- 教授：後藤静夫（芸能史・文化史）
「人形浄瑠璃・文楽の実態研究」
「芸能の伝承研究」「座敷カラクリ研究」
- 准教授：田井竜一（民族音楽学・日本音楽芸能論）

「山・鉾・屋台の囃子の比較研究」
「六斎念仏の研究」

准教授：竹内有一（日本音楽史学）

「音楽芸能資料の書誌的研究」
「伝記資料に関する基礎的調査」

准教授：藤田隆則（民族音楽学）

「中世の歌と語りの作曲法」

「能・狂言の演出史」

「古典／儀礼音楽の伝承形式研究」

◆非常勤講師

上野正章（特別研究員*）

奥中康人（特別研究員）

龍城千与枝（特別研究員）

横山佳世子（特別研究員）

東正子（情報管理員*）

◆非常勤嘱託員

齊藤尚（司書・学芸員*）

木村知美（研究補助員*）

小城篤子（研究補助員）

末松憲子（研究補助員）

長に就任

施設

新研究棟 6～8階（総面積 約1,500m²）

6階 センター所長室、事務室、会議室、資料室、資料管理室、個人研究室

7階 合同研究室2、楽器庫、貴重資料庫

8階 個人研究室5、研究員室2、視聴覚編集室、研修室2

沿革

平成3年6月 世界文化自由都市推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を訴える。

平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及。

平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される。

平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる。

平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置

平成10年4月 施設建設費 予算措置

平成10年10月 施設建設着工（工期17ヶ月）

平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する（室長：廣瀬量平名誉教授）。

平成12年2月 新研究棟竣工

平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設

廣瀬量平名誉教授が初代所長に就任

平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

平成16年4月 吉川周平前教授が第二代所

（※日本伝統音楽研究センター内呼称）

編集後記

「所長対談」の山路興造先生には、吉川周平所長との学友時代の逸話から、近年の学界の動向、そして当センターへの厳しいご注文まで、盛りだくさんの熱いお話をさせていただきました。

吉川所長は、去る2月に退任記念の公開講座「松囃子」をコーディネートされ、久保田教授は、今月の公開講座「地歌箏曲の楽しみⅡ」が定年の節目になりました。新年度には新しい専任スタッフを迎えます。

出版物では、新たに「日本伝統音楽研究センター研究報告」シリーズを設けます。プロジェクト研究・共同研究の活動成果を、テーマごとに一冊にまとめています。研究代表者の監修・編集方針に沿って、共同研究員の方々から多くの原稿をお寄せいただいていることが特徴です。

従来より発行している「紀要」は専任・非常勤スタッフの個別研究を中心に公表する冊子、「資料集成」は各種の資料やデータを客観的なかたちで公表する冊子、「研究叢書」は外部出版社との提携による冊子、といった区分を現在のところ想定しています。

これらと並行して、web媒体の「伝音アーカイブズ」でも各種の研究成果を公表しています。今後はweb媒体を活用する比重がますます高まり、webだけで公表される成果も増えていきます。2007年度に新設されたwebコンテンツの目玉は、SPレコード音源の試聴提供です。ぜひ、当センターwebサイトをあわせてご覧ください。

なお、次号は2009年5～6月頃に発行する予定です。

編集委員 竹内有一

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報 第9号 2008年3月31日発行 編集 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 発行者 吉川 周平 〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6 電話 075-334-2240 FAX 075-334-2241 E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp http://www.kcua.ac.jp/jtm/ 印刷所 株式会社 田中プリント

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts

13-6 Ooe Kutsukake-choo, Nishikyoo-ku

Kyoto-shi, 610-1197, Japan

Tel +81-75-334-2240

Fax +81-75-334-2241

E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp

<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

